研究集録

第 33 回全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会北海道ブロック大会
第 44 回十勝地区国際理解教育研究大会
第　2　回帯広市立大空学園義務教育学校公開研究会

第 44 回北海道国際理解教育研究大会十勝・帯広大会

大会主題

多様な世界に関わり続ける行動力を身に付けた児童生徒の育成

～世界と関わり何ができるかを考え、主体的に行動する学びの創造～

期日：令和５年１１月１日（水）～２日（木）
会場：帯広市立大空学園義務教育学校
　　JICA 北海道・帯広 / 森の交流館
開催：会場と YouTube ライブ配信によるハイブリッド方式

第 44 回北海道国際理解教育研究大会十勝・帯広大会実行委員会

目　　次

1　挨　拶

- 北海道国際理解教育研究協議会　会長　小　松　裕　和・・・・・1
- 北海道国際理解教育研究大会十勝・帯広大会　実行委員長　野　中　利　晃・・・・・2

2　開催要項

- 開催要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
- 開閉会式・全体会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 公開授業・授業別分科会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
- 大会会場図（帯広市立大空学園義務教育学校）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

3　基調報告

- 第 44 回十勝地区国際理解教育研究大会に係る研究の概要　・・・・・・・・・・・・・・・7

4　授業別分科会

- 分科会 A　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
  第 1 学年　生活科「むかしからのあそびをたのしもう」
- 分科会 B・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
  第 4 学年　総合的な学習の時間「世界のごみ問題を考えよう」
  第 5 学年　総合的な学習の時間「大空学園 SDG s はじめの一歩」
- 分科会 C・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
  第 7 学年　理科「光による現象」
  第 8 学年　総合的な学習の時間「総合福祉デザイン～自助具を製作しよう～」
- 分科会 D・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
  後期課程知的学級　第 7 ～ 9 学年　「いただきます」からつながる世界

5　大会運営に関わって

- アンケート結果から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
- 国際理解教育研究大会十勝・帯広大会を振り返って・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

学びをデザインすること・・・・

北海道国際理解教育研究協議会
会長　小　松　裕　和
（札幌市立中沼小学校校長）

「多様な世界に関わり続ける行動力を身に付けた児童生徒の育成～世界と関わり何ができるかを考え、主体的に行動する学びの創造～」を研究主題に掲げ開催された第４４回北海道国際理解教育研究大会　十勝・帯広大会は、全道各地より３００名近い方々が参加する中、無事に終了することができました。この度の全道大会は、新型コロナウイルス感染症の分類変更に伴い、４年ぶりとなる会同形式での大会となりましたが、帯広市立大空学園義務教育学校を会場に６つの授業を公開していただきました。まだまだ感染症が心配される中でしたが、十勝大会実行委員会の皆様のご尽力と会場を提供していただきました帯広市立大空学園義務教育学校の校長先生をはじめ、教職員の皆様のお陰をもちまして、素晴らしい大会に導いていただきました。大会当日まで様々な課題がある中、試行錯誤を繰り返しながら実りの多い大会を開催していただきました十勝地区の皆様には、心より感謝申し上げます。

さて、大会では、小学校の授業が３つ、中学校の授業（特別支援学級を含む）が３つを公開していただきました。授業を公開していただいた大空学園義務教育学校は、９年間の学びの在り方と地域の特色である外国籍児童の在籍という２つの面から国際理解教育を柱に、「学びの構築」を考えられていました。このことは、十勝地区が大切にしている「いつでも」「どこでも」「誰でも」を実現していくうえで大切な視点であり、主体的で対話的な深い学びを創り出すための取組でもあります。

「学びをデザインする」という言葉がありますが、不確実性が増していくこれからの社会で生きる子どもたちにとっては、この「学び」は社会人になってからは「問題を解決していくためのグランドデザイン」として生き続けていくことになります。また、私たち教師自身も「個別最適な学び」「協働的な学び」という命題の中で、「学び＝授業」をデザインすることが求められています。

このことからも今回の大会でご示唆をいただいた「学びの構築」は意義のあるものであったと思います。幸い、本研究協議会には、在外教育施設という異文化環境のもと、多様性を受容しながら協働的な活動の中で個別最適な仕事に邁進してきた方々が多数参加しております。このような経験の中で「学校の教育課程をデザインする（カリキュラム・マネージメント）」ことや「協働性をデザインする」ことには長けていると感じております。このような力を今後の各地区の教育活動に積極的に還元していきたいと考えております。

最後になりますが、本会にご賛同、ご協力をいただいております教育関係団体の皆様、各地区会員の皆様には、今大会へのご参加に心より感謝申し上げますとともに、今後とも本会へのご支援とご協力をお願い申し上げます。

研究集録の発刊にあたって～感謝の気持ちとともに～

第４４回北海道国際理解教育研究大会十勝・帯広大会
実行委員長　野　中　利　晃
（帯広市立帯広小学校校長）

１１月１日（水）２日（木）、森の交流館、JICA 北海道・帯広、帯広市立大空学園義務教育学校を会場に本研究大会が４年ぶりに対面形式で開催され、成功裏に終えることができました。本大会の成果と課題を本研究集録にまとめましたのでご一読ください。併せてご協力いただきました皆様に、次のとおり感謝の気持ちを申し上げます。

＜参集くださいました皆様へ＞

参加者数の大小が、大会成功への大きな要素となることは言うまでもありません。国際理解教育に関心が高い教職員が多く集まれば、研究協議の質も深まりますし、関係者のモチベーションも高まります。今回、行事等が重なる校務ご多用の折にもかかわらず、全道各地より２８０名を超える皆様に参集いただきました。また、多くの皆様が閉会式まで残ってくださり、大会を最後まで盛り上げてくださいました。参加くださった皆様、ご配慮いただいた管理職の皆様に心よりお礼申し上げます。

＜北海道国際理解教育研究協議会の皆様へ＞

全道大会が対面で開催されたのは、令和元年（2019 年）の上川・旭川大会以来です。ただ、上川・旭川大会が全国大会としての開催であったため、全道大会単独の開催は、さらに平成 30 年（2018 年）の後志大会までさかのぼることになります。資料やデータが不足する中、道協議会の小松裕和会長、井上博文事務局長におかれましては、前年度オンラインにて大会を開催された釧路地区の皆様とつないでいただくなど、多くのご助言を賜りました。また、夏の学習会の際に各地区の皆様からいただいたご意見も大変参考になりました。ありがとうございました。

＜帯広市立大空学園義務教育学校の皆様へ＞

「授業が良かった」は、実行委員会としてもっとも嬉しい感想です。大空学園義務教育学校の皆様が、本大会の５本の授業公開を一手に引き受けてくださいました。また、自校の校内研究を本会の研究と関連づける中で、本会の研究の意図を酌み取り、授業づくりに反映させてくださいました。大会運営や当日のアトラクションも含め、児童生徒の素晴らしい姿を見せていただくことができました。充実した大会を共に創り上げてくださった村松正仁校長先生を始め大空学園義務教育学校の皆様に、心より感謝申し上げます。

＜十勝・帯広大会実行委員の皆様へ＞

大会実行委員会は、合田真晃事務局長を中心に各部長が連携し、各部員が本大会を自分事として捉え、尽力していく。当に「自走する組織体」として、大会成功に向けて機能しました。授業づくりや会場づくり、関係機関との連携、広報活動、オンライン配信、参加費ゼロへの挑戦等、それぞれの部員がアイディアを持ち寄り、会議を重ね、日ごとに質の高い大会へと育てていくことができました。素晴らしいメンバーとともに大会運営できたことを大変嬉しく、誇りにも感じたところです。大会アドバイザーや副委員長の皆様の存在も、頼もしく心強く感じました。ありがとうございました。

＜北海道教育委員会、帯広市教育委員会、JICA 北海道・帯広、関係の機関の皆様へ＞

結びとなりますが、授業づくりや研究の深化に向けてご指導、ご助言を賜りました北海道教育委員会、帯広市教育委員会、JICA 北海道(帯広)、ご後援いただいた関係機関の皆様に厚くお礼申し上げ、大会のバトンを次期開催地である胆振地区へとお渡しします。

開催要項

小麦畑

開　催　要　項

第３３回　全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会北海道ブロック大会
第４４回　十勝地区国際理解教育研究大会
第　２　回　帯広市立大空学園義務教育学校公開研究会

第４４回　北海道国際理解教育研究大会 十勝・帯広大会

大会主題　多様な世界に関わり続ける行動力を身に付けた児童生徒の育成
～世界と関わり何ができるかを考え、主体的に行動する学びの創造～

主　催　全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会
北海道国際理解教育研究協議会

主　管　十勝地区国際理解教育研究会

後　援　文部科学省　公益財団法人海外子女教育振興財団　北海道教育委員会
北海道小学校長会　北海道中学校長会　帯広市教育委員会
十勝管内教育委員会連絡協議会 十勝教育研修センター　十勝小・中校長会
帯広市校長会 公益財団法人日本教育公務員弘済会北海道支部
独立行政法人国際協力機構北海道国際センター（JICA 北海道・帯広）

１　期　日　　令和５年１１月１日（水）～２日（木）

２　会　場　　帯広市立大空学園義務教育学校　森の交流館　JICA 北海道・帯広

３　協力校　　帯広市立大空学園義務教育学校

４　日　程

【１日目　１１月１日（水）　会場：森の交流館】
１３：００～１３：３０　受付
１３：３０～１５：００　全道理事研修会・総会・研究担当者会議
１５：１５～１６：００　JICA 北海道・帯広 見学

【２日目　１１月２日（木）　会場：帯広市立大空学園義務教育学校】
９：００～　受付
９：３５～１０：２５　授業公開Ⅰ（３公開）
１０：４５～１１：３５　授業公開Ⅱ（４公開）
１１：４５～１２：１５　開会式
１２：１５～１３：１５　昼食・休憩（大空学園吹奏楽部レセプション）
１３：１５～１３：３５　全体会
１３：４０～１５：００　授業別分科会
１５：１０～１５：３０　閉会式

5　開閉会式・全体会

【開会式　１１月２日（木）１１：４５～　会場：メインアリーナ】

＜進行＞十勝・帯広大会事務局長　合田　真晃

1	開式の言葉	十勝・帯広大会実行委員長	野中　利晃
2	挨　　拶	北海道国際理解教育研究協議会会長	小松　裕和
		全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会会長	滝　多賀雄
		帯広市立大空学園義務教育学校校長	村松　正仁
3	祝　　辞	北海道教育庁十勝教育局局長	新山　知邦 様
		帯広市教育委員会教育長	広瀬　容孝 様
4	来賓紹介	十勝・帯広大会副実行委員長	稲葉　珠樹
5	閉式の言葉	十勝・帯広大会副実行委員長	笠松　真一郎
6	諸連絡	十勝・帯広大会事務局次長	岩﨑　直希

【全体会　１１月２日（木）１３：１５～　会場：メインアリーナ】

＜進行＞十勝・帯広大会事務局長　合田　真晃

1	基調提言	北海道国際理解教育研究協議会研究部長	関本　勝幸
2	研究発表	十勝地区国際理解教育研究会研究部長	益子　忠行
		帯広市立大空学園義務教育学校研究部長	竹内　允人

【閉会式　１１月２日（木）１５：１０～　会場：メインアリーナ】

＜進行＞十勝・帯広大会事務局長　合田　真晃

1	開会の言葉	十勝・帯広大会副実行委員長	牧　伊津子
2	挨　　拶	十勝・帯広大会実行委員長	野中　利晃
3	次期開催地挨拶	胆振地区国際理解教育研究会会長	髙橋　慎治 様
4	閉式の言葉	十勝・帯広大会副実行委員長	小室　彰人

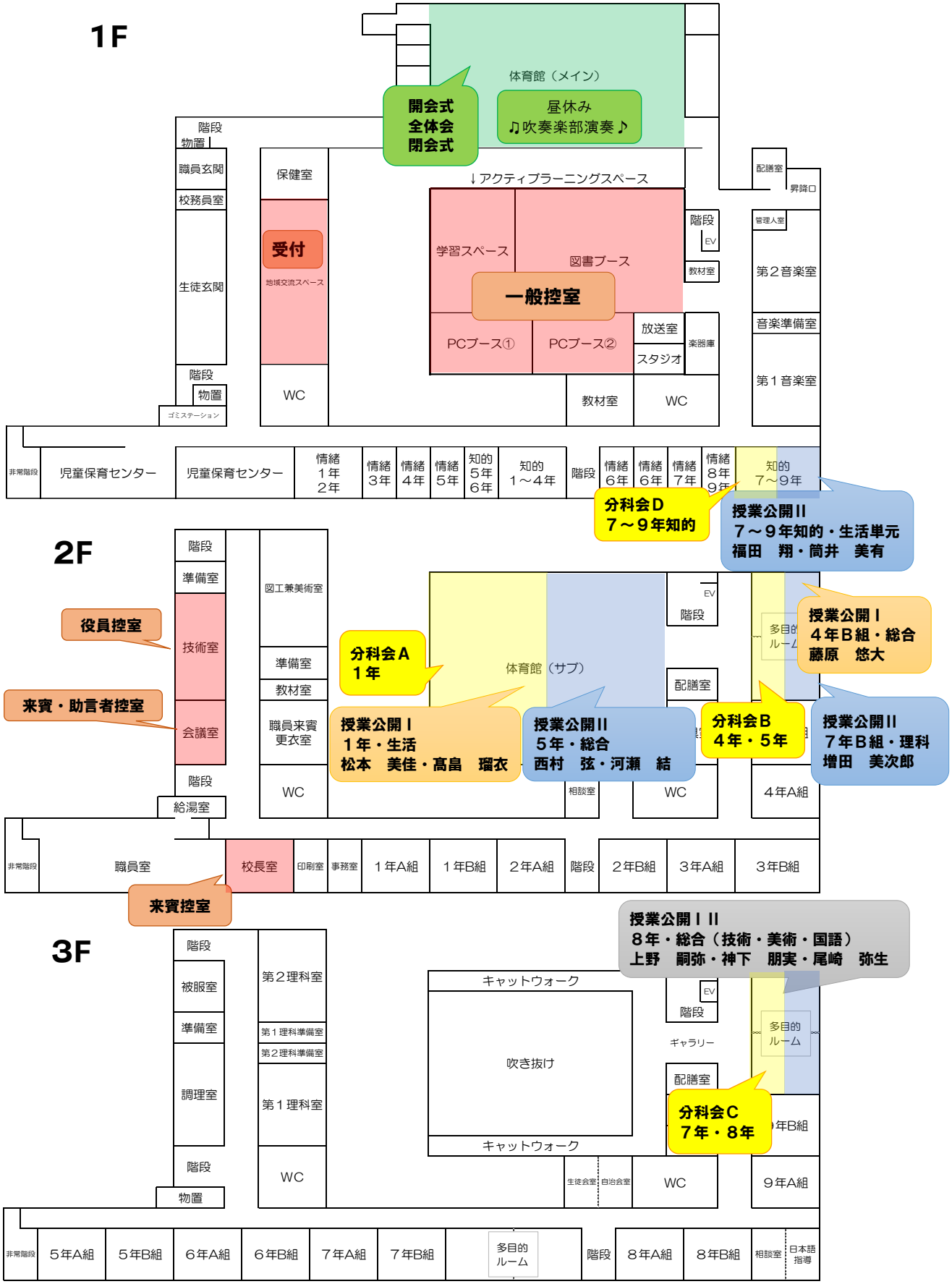
公開授業　公開Ⅰ（9：35～10：25）　公開Ⅱ（10：45～11：35）

授業公開	授業者	教科 学年・学級	単元名
授業公開Ⅰ	松本　美佳 髙畠　瑠衣	生活科 1年生	むかしからのあそびを たのしもう
授業公開Ⅰ	藤原　悠大	総合的な学習の時間 4年B組	世界のごみ問題を 考えよう ～日本と海洋ごみ～
授業公開Ⅱ	西村　弦 河瀬　結	総合的な学習の時間 5年生	やってみよう!SDGs
授業公開Ⅱ	増田　美次郎	理科 7年B組 (中学1年)	光・音・力による現象 1章　光による現象
授業公開 ⅠⅡ	上野　嗣弥 神下　朋実 尾崎　弥生	総合的な学習の時間(技/美/国) 8年生 (中学2年)	総合福祉デザイン ～発表会～
授業公開Ⅱ	福田　翔 筒井　美有	生活単元学習 7～9年　Ⅰ組 （中学1～3年　知的学級）	【いただきます】から つながる世界

授業別分科会（13：40～15：00）

授業公開		助言者	司会者	記録者	運営者
分科会 A	1年	帯広市教育委員会 指導主事 田隈　泰邦	音更町立 鈴蘭小学校 大塚　智博	更別村立 上更別小学校 村上　加鈴	帯広市立大空学園 義務教育学校 津田　佳子
分科会 B	4年	北海道教育庁十勝教育局 主任指導主事 水野　宏美	音更町立 東士狩小学校 平井　久文	音更町立 木野東小学校 宮原　玲奈	帯広市立大空学園 義務教育学校 竹内　允人
	5年	北海道教育庁十勝教育局 指導主事 安田　英憲			
分科会 C	7年 (中学1年)	北海道教育庁十勝教育局 指導主事 國木　勇輔	幕別町立 札内東中学校 山﨑　靖恵	帯広市立 帯広第八中学校 坂本　将人	帯広市立大空学園 義務教育学校 樋口　賢裕
	8年 (中学2年)	帯広市教育委員会 指導主事 松本　好史			
分科会 D	7～9年 (中学1～3年) 知的	北海道教育庁十勝教育局 指導主事 加藤　章芳	帯広市立 明星小学校 西保　雄介	帯広市立 豊成小学校 中山　麻衣	帯広市立大空学園 義務教育学校 西田　美里

大会会場図（帯広市立大空学園義務教育学校）



基調報告

小麦ロール

第44回十勝地区国際理解教育研究大会に係る研究の概要

十勝地区国際理解教育研究会　研究部

1　研究主題（３年次計画の３年目）

多様な世界に関わり続ける行動力を身に付けた児童生徒の育成

～世界と関わり何ができるかを考え、主体的に行動する学びの創造～

2　研究主題・副主題の設定について

十勝地区国際理解教育研究会では、平成26年度より国際実践力の育成をテーマに研究を推進してきた。世界との関連性（教室と世界をつなげる）を重視し、グローバル社会を生き抜く行動力を身に付けた児童生徒の育成を目標に活動してきた。変化が激し、前例のないできごとが起きる国際社会の中で、既成の知識だけでは対応できない状況を生き抜いていく資質の基礎基本を学校で身に付けさせ、習得した知識や技能、思いを生かし、生き抜く力(学びで得た成果 outcome)を高めるための研究を進めてきた。そこで得た多くの実践や研究成果は、わたしたちや北海道の宝となっている。そのような成果を踏まえ、さらなる高みをめざして十勝らしい研究を推進していくとともに、学習指導要領の趣旨を踏まえた、新たな視点を掲げる必要性がある。

これまで、国際理解ベーシックの作成や研究大会を中心として行ってきた授業研究を進める過程で、「自国を知り、世界とのつながりの中で、日本としてあるいは日本人としてどう考え、どう行動していくのか、考えさせる授業」の大切さが確認されてきた。そのためには、子供たちにとって刺激的な題材を通して、世界と関わることに楽しさを感じさせ、新たな価値を創造し、行動化につなげる国際実践力を身に付けることが大切と考える。

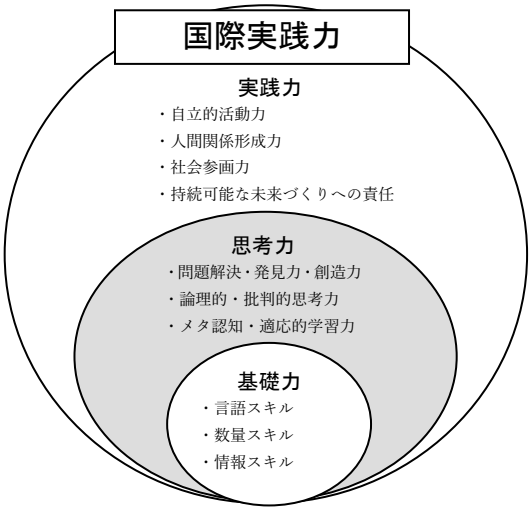
国際理解ベーシック

・ＢＡＳＩＣ　１(地理的項目)「世界に触れる」
　世界の各地域名や主要な国の位置、特徴等を身に付けることができる。

・ＢＡＳＩＣ　２（文化・言語的項目－体験・経験）「世界を考える」
　多くの日本と異なる世界の文化や価値観、言語を体感・実感することができる。

・ＢＡＳＩＣ　３（情報発信・行動的項目－表現・意識）「自分と世界をつなぐ」
　主体的に情報を収集したり、発信したり、地球市民として行動したりする素地、スキル、自覚を身に付けさせることができる。

○　国際実践力の育成を目指して



『学習指導要領解説　総合的な学習の時間編』には、「グローバル化が一層進む中で横断的・総合的な課題として国際理解に関する課題を扱い、探求的な学習を通して取り組んでいくことは意義のあることである（第２節『内容の取扱いについての配慮事項（８）』）」と記されている。

問題が複雑化・高度化し「決まった正解」がない社会では、課題を共有する人同士で試行錯誤しながら身に付けた知識や技能を活用・発揮しながら、納得解や最適解を創り上げながら、解決していくことが大切である。「世界に対して何を知っているか」だけではなく「世界に対して何ができるか」「他者と協働して、いかに問題解決できるか」を学びのゴールとし、世界と様々な形で関わる授業づくりを通して、国際実践力を育む研究とともに、「いつでも、どこでも、だれでもできる国際理解教育・世界との関わり」という原点に立ち返りつつ、新たな研究を推進する。

3　めざす子供の姿

(1) 生活体験や知識をもとに、世界との関わりを感じ、何ができるかを考える児童生徒

(2) 世界の中の日本及び日本人としての在り方を考え、対話等を通して主体的に課題を解決する児童生徒

4　研究仮説及び理由

(1) 仮説１

体験的な学習を設定することで、世界が抱える課題を「自分ごと」として考えることができる。

広く様々な国や地域を視野に入れ、外国の生活や文化を体験し慣れ親しむことや、衣食住といった日常生活の視点から、身近なことと遠い世界のこととのつながりを発見したり、世界との関わりを楽しんだりすることが重要である。世界が抱える課題を「自分ごと」として考え、文化の違いやその背景について調査したり追求したりするとともに、体験したことを議論したり発表したりするなど、世界に対して何ができるかを考える幅広い学習を展開することができる。

(2) 仮説２

問題解決的な学習を行うことで、新たな価値に気付き、主体的に行動しようとする意欲と能力を身に付けることができる。

日本と諸外国との関係について学ぶ際に、地球温暖化や食料輸出入の問題のように、価値が対立する問題に出会うことがある。そのような問題を積極的に生かして、世界中には多様な考え方や価値が存在することを実感できるような場面を設定する。

さらに対話を通して他者との違いや考えを吟味して統合し、それを解決する方法を考えたり、討論したりすることで、国際的に協調して取り組むことの重要さや難しさについて考える。同時に、他者と協力して、よりよい解や新たな価値を創造し、いかに問題を解決できるかを主体的に行動しようとする意欲及び能力を身に付ける学習を展開することができる。

5　教材づくりの視点

(1) カリキュラム・マネジメントについて【ＢＡＳＩＣ　１・２】

各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間、さらに小学校においては外国語活動との関連を図りながら、教科等横断的な視点で、教育課程に国際理解教育の学習内容を位置付けることが重要である。児童生徒に異文化を理解させながら世界の現実に触れる場の蓄積を図るとともに、実際の授業で、体験的な学習（活動）の場面を設定し、児童生徒が繰り返し自分と世界のつながりを意識する場面を多く設定する必要がある。

(2) 国際実践力の育成【ＢＡＳＩＣ　３】

国際実践力の中核に、一人一人が自ら学び判断し自分の考えを持って、他者と話し合い、考えを吟味してよりよい解や新しい知識を創り出し、さらに次の問いを見付ける力としての思考力がある。対話を通して他者との違いや考えを吟味して統合し、それを解決する方法を考えたり、討論したりする学習活動（output活動）で身に付けた思考力は、実生活における問題解決において、自らが置かれた回りの世界と様々に関わりながら、自己の信念や価値観を吟味し、具体的な行為を選択し、いかに行動すべきかを決定し問題を解決していくために主体的に活動（outcome活動）する国際実践力となる。

国際実践力の育成には、基礎力となる「世界に触れる（何を理解しているか、何ができるか）」「世界を考える（理解していること・できることをどう使うか）」「自分と世界をつなぐ（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）」という学習活動（intake活動）を基盤とし思考力の充実を図ることが重要である。

6　授業づくりの視点

児童・生徒の学ぶワクワク感、教科の学びが自分の設定した課題の解決に活きているという実感、自分の学びを自分で調整する力をどう育むのか、「好き」や「夢中」を手放さない学びを実現する。国際理解教育で育成する資質・能力は、世界とそこに住む人々、さらには、生物や環境、資源などを地球という一つの閉じられた生態系の中で捉え、大きな地球規模の歴史の流れの一つとして「今」を理解しようする地球的な視野を持つことが大切である。そのうえで、国際的な課題やグローバルな課題に対して、「私には何ができるのか」という問いかけと行動をうながす、グローバル意識の醸成を図りながら進める必要がある。

(1) intake活動（「気づき」と「対話」のある学び）

児童生徒に異文化を理解させながら世界の現実に触れる蓄積を図るとともに、体験的な学習を通して、自分と世界のつながりを意識する活動

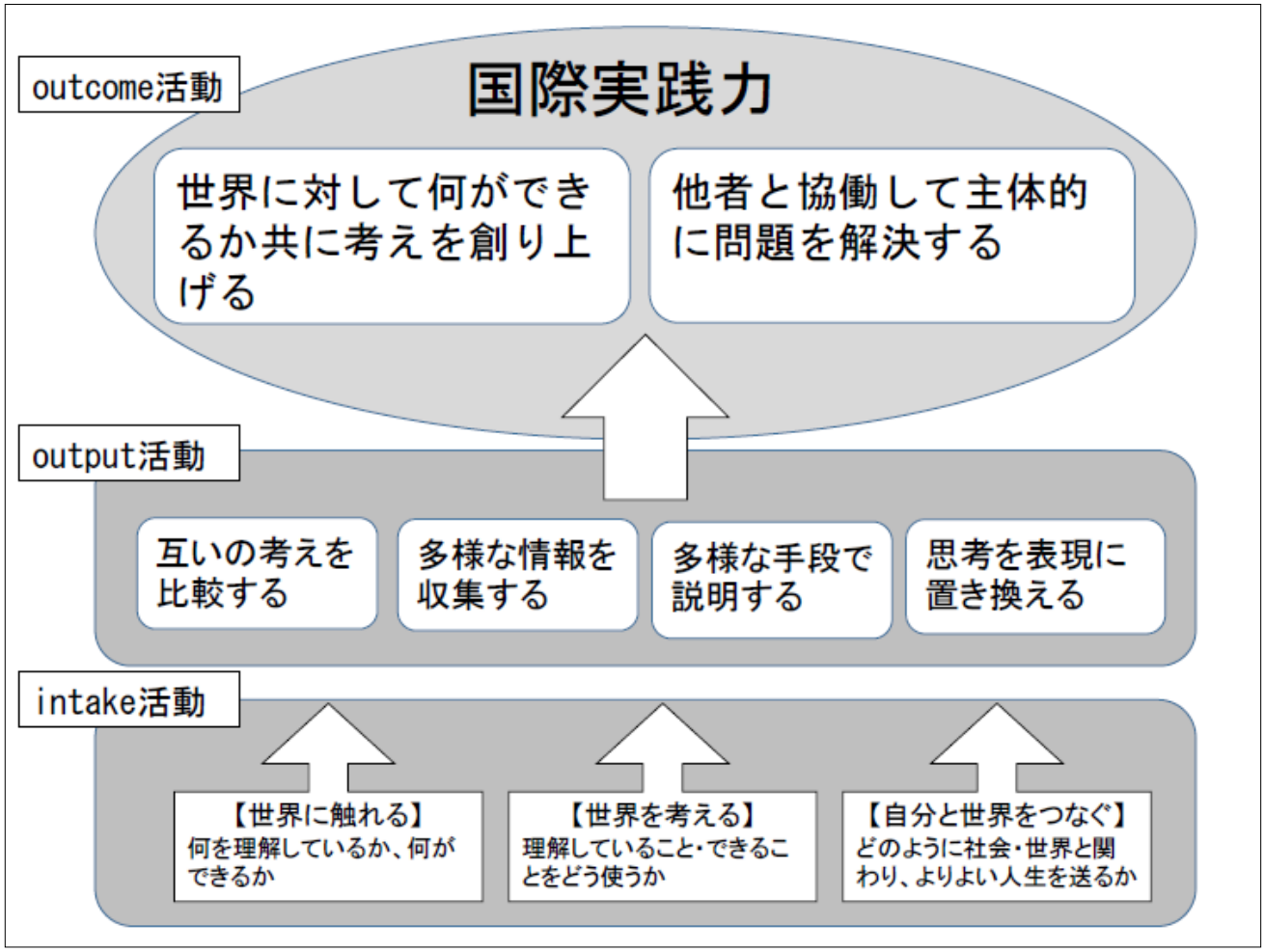
(2) output活動（協働的な学び）

対話を通して他者との違いや考えを吟味して統合し、課題を解決する方法を考えたり、討論したりする活動

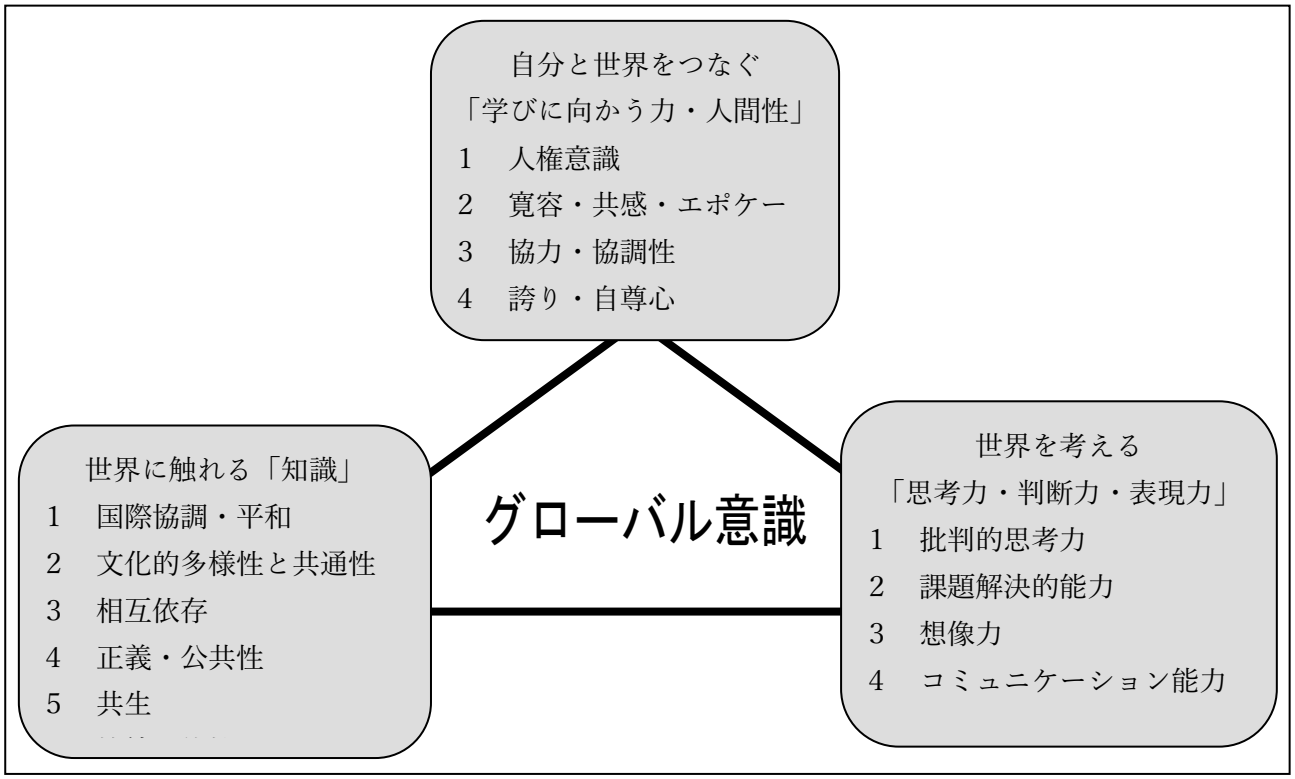
(3) outcome活動（主体的に行動する学び）

自己の信念や価値観を吟味し、具体的な行為を選択し、いかに行動すべきかを決定し課題を解決するための主体的な活動

○　国際実践力の育成について



○　授業づくりの視点について



十勝地区国際理解教育研究会　研究の全体構造図

第十四次研究について

研究主題　**（北海道国際理解研究協議会）**

多様な世界に関わり続ける行動力を身に付けた児童生徒の育成の育成

めざす子どもの姿

未来へ向けて、主体的に行動する児童生徒

めざす授業の姿

児童生徒が対話を通して生き生きと学び合う授業

十勝国際理解教育研究会の研究について

研究主題

多様な世界に関わり続ける行動力を身に付けた児童生徒の育成

研究副主題

～世界と関わり何ができるかを考え、主体的に行動する学びの創造～

めざす子どもの姿

○　生活体験や知識をもとに、世界との関わりを感じ、何ができるかを考える児童生徒
○　世界の中の日本及び日本人としてのあり方を考え、対話等を通して問題を解決する児童生徒

研究仮説

仮説１：体験的な学習を設定することで、世界が抱える課題を「自分ごと」として考えることができる。

仮説２：問題解決的な学習を行うことで、対話を通して新たな価値に気付き、主体的に行動しようとする意欲と能力を身に付けることができる。

教材づくりの視点

(1) カリキュラム・マネジメント
(2) 国際実践力の育成

授業のポイント

(1) intake 活動：児童生徒に異文化を理解させながら世界の現実に触れる蓄積を図るとともに、体験的な学習を通して、自分と世界とのつながりを意識する活動
(2) output 活動：対話を通して他者との違いや考えを吟味して統合し、問題を解決する方法を考えたり、討論したりする活動
(3) outcome 活動：自己の信念や価値観を吟味し、具体的な行為を選択し、いかに行動すべきかを決定し問題を解決するための主体的な活動

1

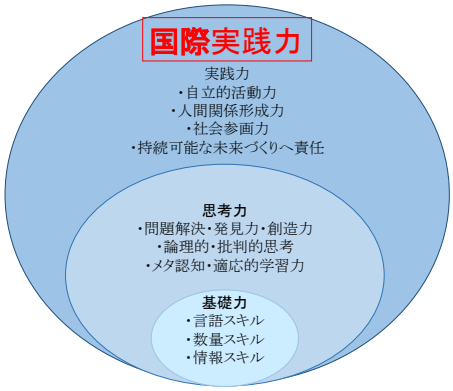
多様な世界に関わり続ける行動力を身に付けた児童生徒の育成

～世界と関わり何ができるかを考え、主体的に行動する学びの創造～

十勝地区国際理解教育研究会　研究部

2

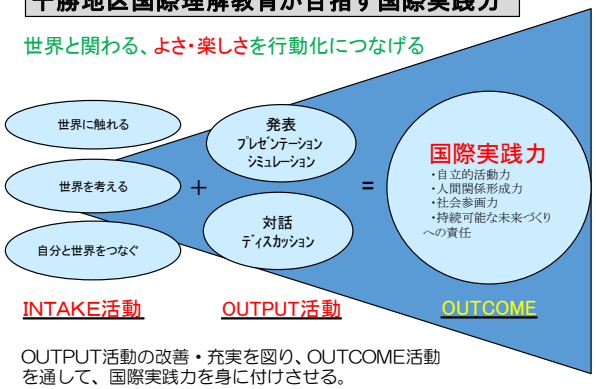
国際実践力の育成を目指して



3

十勝地区国際理解教育が目指す国際実践力

世界と関わる、よさ・楽しさを行動化につなげる



OUTPUT活動の改善・充実を図り、OUTCOME活動を通して、国際実践力を身に付けさせる。

4

十勝地区国際理解教育が目指す授業実践

INTAKE活動（世界に関わるよさ・楽しさを知る）

- 世界に触れる → 自分の生活や地域を結びつけながら、何を理解しているか・何ができるか
- 世界を考える → 地球や世界が抱える課題の解決に向け、理解していること・できることをどう使うか。
- 自分と世界をつなぐ → 多様な他者と協働し、どのように世界と関わり、より良い人生を送るか。

5

十勝地区国際理解教育が目指す授業実践

OUTPUT活動
（多様な人々と協働することのよさ・楽しさを感じる）

- 互いの考えを比較する
- 多様な情報を収集する
- 多様な手段で説明する
- 思考を表現に置き換える

OUTCOME活動
（あらゆる他者を価値のある存在として尊重する）

- 世界に対して何ができるか共に考えを創り上げる。
- 他者と協働して主体的に課題を解決する。

6

十勝地区国際理解教育が目指す子どもの姿

(1) 生活体験や知識をもとに、世界との関わりを感じ、何ができるかを考える児童生徒

(2) 世界の中の日本及び日本人としての在り方を考え、対話等を通して主体的に課題を解決する児童生徒

十勝地区国際理解教育研究会の研究仮説

仮説1
体験的な学習を設定することで、世界が抱える課題を「自分ごと」として考えることができる。

仮説２
問題解決的な学習を行うことで、新たな価値に気付き、主体的に行動しようとする意欲と能力を身に付けることができる。

7

研究仮説１

体験的な学習の設定
・外国の生活や文化を体験し慣れ親しむ。
・衣食住といった日常生活の視点で、身近なこととつながりを発見したり、世界との関わりを楽しんだりする。 など

世界の抱える課題を「自分ごと」としてとらえる
＝関心・意欲の喚起

知らなかった　同じだね　違うね　そうだったんだ
不思議だなあ　楽しそう　やってみたい　すごいね

・文化の違いやその背景について調査・追究する。
・体験したことを議論したり、発表したりする。
・世界に対して何ができるかを考える。

8

研究仮説２

問題解決的な学習の設定
・地球温暖化や食料輸出入の問題など、価値が対立する問題に出会う。
・世界中には多様な考え方や価値が存在することを実感する。 など

新たな価値に気付き協働して課題を解決する
＝主体的な行動化の喚起

こうあるべきだ　何とかしたい　自分ならこうするな　みんなでやろう
できることは何　分かり合おう　今よりもっと　これからもずっと

・国際的に協調して取り組むことの重要さや難しさについて考える。
・他者と協力して、よりよい解や新たな価値を創造する。
・いかに問題を解決できるかを主体的に行動する。

9

十勝地区国際理解教育の教材づくりの視点

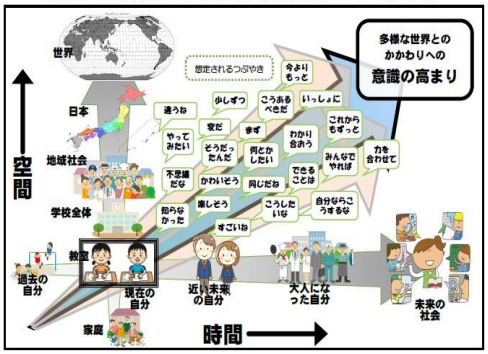
(1) カリキュラム・マネジメント

国際理解BASIC
教科等横断的な視点で教育課程に国際理解教育を位置づける

10

北海道国際理解教育研究協議会第3次研究から

時間・空間軸上でとらえる行動力へのベクトル



11

十勝地区国際理解教育の授業のポイント

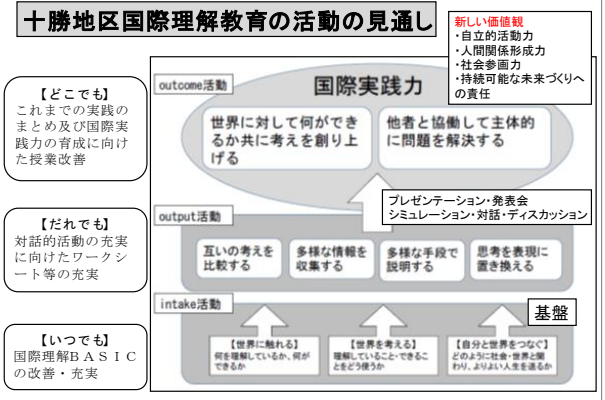
(1) intake活動
　児童生徒に異文化を理解させながら世界の現実に触れる蓄積を図るとともに、体験的な学習を通して、自分と世界のつながりを意識する活動

(2) output活動
　対話を通して他者との違いや考えを吟味して統合し、課題を解決する方法を考えたり、討論したりする活動

(3) outcome活動
　自己の信念や価値観を吟味し、具体的な行動を選択し、いかに行動すべきかを決定し課題を解決するための主体的な行動

12

十勝地区国際理解教育の活動の見通し



授業別分科会

ばんえい競馬

分科会Ａ　第１学年　生活科「むかしからのあそびをたのしもう」

【学習指導案（第１学年）】

第１学年　生活科　学習指導案

日　時　令和５年１１月２日（木）第２校時
児　童　１年Ａ組　２５名・１年Ｂ組　２５名
指導者　Ｔ１：松本　美佳　Ｔ２：髙畠　瑠衣

１　単元名　むかしからのあそびをたのしもう

２　単元について

本単元は、小学校学指導要領生活科編に示されている内容「（８）自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝えあう活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合いを交流しようとする。」を中核に据えて設定した単元である。

本学年の学園生には、４名の外国籍の児童がいる。しかし、互いに入学した時から一緒の友達という認識のみで、国や文化には全く関心がないのが現状である。そこで、日本の伝承遊びを学習していく中で、遊びは日本だけのものではなく、世界にも遊びがあることに気付かせ、そこから世界に目を向けていく素地としたい。

本学年の学園生は、学校では鬼遊びなど集団遊びを好んでしているが、帰宅後はゲーム機を使用したりＳＮＳ投稿動画を視聴したりするなどを好んでいる。

伝承遊びを取り上げることで、素朴な楽しさに触れさせ、ゲーム機以外にもいろいろな遊びがあることに気付かせながら、自らの遊び場を広げていこうとする力をつけさせたい。また、伝承遊びは、習得するのには得意な人に教えてもらい、コツをつかむことが必要になる。そこで、伝承遊びを通して、身近な人々や友達とのコミュニケーションを深めていったり、地域のお年寄りやＪＩＣＡ（独立行政法人国際協力機構）や帯広市国際協力派遣員の方に来ていただき遊びを教えてもらったりすることにより、いろいろな人と関わることの楽しさや自国の文化と他国の文化の相違点を感じさせ、自分も相手も大切にしようとする思いを育んでいくことができると考える。

３　国際理解の目標

- ＢＡＳＩＣ-１（地理的項目－知識・理解）⇒【intake活動】
  世界の遊びを体験し、いろいろな遊びがあることを知る。日本の昔遊びと違うところがあることに気付く。
- ＢＡＳＩＣ-２（文化・言語的項目－体験・経験）⇒【output活動】
  見つけた相違点を交流する。似ている遊びがあることや、遊び方は違うが遊ぶ人数や使う道具が似ているなどの相違点を学ぶ。
- ＢＡＳＩＣ-３（項目－情報発信・行動的体験・経験）⇒【outcome活動】
  自国の文化と他国の文化の相違点を感じながら受け入れ、認めようとすることができる。

４　単元の目標

地域のお年寄りや外国の方から昔の遊びを教えてもらい、交流や自分なりに工夫した遊びを通して、日本と外国の違いを見つけることができる。

５　大空学園の研究に関わって

①自国の文化を大切にすると共に、異文化を認めることができる学園生

日本の遊びと外国の遊びを比較することにより、異文化を認めたり、自分の文化のよさに気付いたりすることができるよう取り組んでいきたい。

②異文化や多様性を尊重し、主体的に行動しようとすることができる学園生

日本の遊びだけではなく、外国の遊びを体験することにより、異なる文化に興味を示し、さらに知ろうとする意欲につなげられるよう取り組んでいきたい。

６　指導計画

学習段階	授業の展開	評価の手立てと観点 □評価　◆手立て
１次（４時間） （自国を知る）	昔遊びで知っていることを交流する。	□発表・交流・振り返り
	自分たちだけで遊んでみる。	□行動・交流・ワークシート・振り返り ◆学習段階に応じたワークシートを用意する。
	どうしたら上手に遊べるかを話し合う。	□発表・交流・ワークシート・振り返り
	日本の遊びを地域の人に教えてもらう。	□行動・交流・ワークシート・振り返り
２次（２時間） （他国を知る） 【本時】	遊び方には「コツ」があることに気付き、昔遊びが他の国にもあるのではないかというところから次時に繋げる。	□発表・交流・ワークシート・振り返り
	外国の遊びを体験し、初めて知った遊びにも日本の遊びと同じように遊び方に「コツ」があることに気付く。【intake活動・output活動】	□行動・発表・交流・ワークシート・振り返り
３次（３時間） （まとめ）	前時までに学んだことからわかったことや、もっと知りたいこと、感想を次時の発表会に向けてまとめる。【output活動】	□発表・ワークシート・振り返り
	この単元で学んだことを発表する。【outcome活動】	□発表・ワークシート・振り返り

７　本時の目標

○　外国の方から昔の遊びを教えてもらい、交流や自分なりに工夫した遊びを通して、日本と外国の違いを見つけることができる。

○　世界の遊びを体験し、いろいろな遊びがあることを知る。日本の昔遊びと違うところがあることに気付く。

○　見つけた相違点を交流する。似ている遊びがあることや、遊び方は違うが遊ぶ人数や使う道具が似ているなどの相違点を知る。

8　本時の展開

主な学習活動		□評価◆留意点	●国際理解の活動
T1	T2		
○はじめのあいさつ ○前時の振りかえりとして、日本の遊びには「コツ」があったことを再確認し、本時では外国の遊びを体験することを確認する。 ○日本じゃない国の遊びをしたことがあるかな？ ○どんな国を知っているかな？ ○違うところはあると思う？ ○同じところはあると思う？	○前時の振り返りについてのT1の問い掛けについて子どもたちが考えるのを支援する。	◆自国と他国の遊びについて考えることを通して、他国への関心を高める。	●外国にも昔から遊ばれている遊びがあることを知る。 【intake活動】
○外国の方々を紹介し、持ってきていただいた遊びを見せる。（やっているところはまだ見せない。形や色などの特徴を子どもたちに伝える。） 「どうやってあそぶのかな？」 「日本のあのあそびに似ている！でも、あそびかたは同じなのかな？」	○子どもたちが見えやすいように外国の方々の遊びを見せる。		
○外国の方々に遊びを見せてもらう。 「私たちも上手にできるかな？」 「どうやったらできるのだろう・・・？」 ○日本の遊びには「コツ」があったことを確認する。 「外国のあそびにもコツがあるのかもしれない・・・」	○日本の遊びのコツを提示する		●外国の遊びの遊びかたを知り、実際に体験する。 【intake活動】
【課題】にほんのあそびとがいこくのあそびをくらべてみよう！			
○コツ集めスタンプラリーについての説明をする。 コツ集めスタンプラリー ①外国の遊びのブースに行き、外国の方から遊び方やコツを聞く。 ②ワークシートにコツの付箋を貼る。スタンプを押してもらったら次のあそびへ進む。 ③すべての遊びのスタンプを集めたら、自分の席へ戻る。	○外国の方にコツを聞くときの子どもたちを支援する。	□遊んでみて、わからないことや難しいことを意欲的に質問している。 □外国の方と触れ合いながら遊びを教えてもらっている。	●外国の遊びのコツを全体で共有し、日本の遊びとの共

		◆安全面に配慮する。 ◆各ブースを周り、進捗状況を見て、声掛けをする。	通点や相異点を考える。 【output活動】
○友達の発表を聞いて、子どもたちがコツに気付くことができるように支援する。	○どんなコツがあったかを共有し、日本の遊びと同じところや違うところを全体で見つける。 「○○は同じだけど、△△は違うんだね！」 「使う道具は似ていたけどコツや遊び方は違った！」 ○１年Ｂ組のグマ　ハナコキさんのお母さんから、ケニアの文化や遊びについてお話を聞く。 「違うところと同じところがあったね！」	□コツのカードを使って、日本と外国の遊びの共通点や相違点を考えることができている。 □友達の発表を聞いて、コツに気づくことができる。	
【まとめ】にほんのあそびとがいこくのあそびには、にているところもあるが、ちがうところもある。			
	○振り返り ○次時で、本時で分かったことや、もっと知りたいことをまとめることを伝える。	□学習を振り返り、気づいたことを発表している。 □進んで発表したり、友達の発表を最後まで聞いたりしている。 ◆次時の学習の見通しをもてるようにする。	●遊びに共通点や相違点があったように、日本と外国の文化にも共通点や相違点があることを知る。 【intake活動】

【分科会Aから】

1．intake・output・outcome活動を通して育成する国際実践力の育成

intake活動・output活動・outcome活動を通して国際実践力の育成が図られていた。			
そう思う	58%	どちらかといえばそう思う	42%
あまり思わない	０%	思わない	０%

- １学年が発達段階で三つの活動について、学びのゴールに向け、既習事項をどのように活用するかなどの意図的な取組および児童が「何ができるようになるか」を実感するため活動の充実を考える機会となった。
- お互いを認め合う気持ちが身に付いていたため、「同じ」「違う」を見つけて楽しく活動する姿が見られた。
- 低学年では、intakeの活動が主になるため、年間計画や小中連携の過程を通して、output活動・outcome活動の割合を変えながら指導する必要性を感じることができた。
- １学年という発達段階では、３つの活動を全て取り入れるのではなく、体験的な活動を中心とした単元構成を考える必要があるのではないかと感じる場となった。

2．学びのゴール　世界に対して「何ができるか」を共に考え、創り上げる

「世界に対して『何ができるか』を共に考え、創り上げる」児童生徒の学びの姿の育成が図られていた。			
そう思う	67%	どちらかといえばそう思う	25%
あまり思わない	８%	思わない	０%

【成果（〇）と課題（▲）】

〇 事前に学んだ日本の遊びとのつながりを意識しながら、講師の説明を聞こうとする姿を見ることができた。

〇 シンキングタイムでは、日本の遊びと比較がしやすいようワークシート等を活用し、考える視点を明確にしていたため、外国の人との関わりや海外の遊びを、実体験を通して、経験と結びつけながら主体的に取り組む姿を見ることができた。

〇 指導計画の段階で、気付きから発展まで設定されていたため、まとめを行うことで、深い学びにつながる構成が図られていた。

〇 外国籍保護者の方から多文化の紹介があったため、世界の日常生活を知ることで、文化に関心を持つ工夫が図られていた。

▲ 外国の遊びと比べることで自分たちの遊びについて知ることなど、「気付く」ことにのみに焦点化されていたため、発達段階に応じ、背景や歴史なども踏まえた学習の充実を図る必要がある。

3. 学びのゴール　他者と協働して主体的に課題を解決する

「他者と協働して主体的に課題を解決する」児童生徒の学び姿の育成が図られていた。			
そう思う	75%	どちらかといえばそう思う	17%
あまり思わない	８％	思わない	０％

【成果（〇）と課題（▲）】

〇　グループごとに活動を進めリーダーを中心に学びを進めている姿を見ることができた。

〇　学びの途中で、班内での思考する時間を設定していたため、対話をする姿を見ることができた。

〇　遊びを体験して終わりにするのではなく、思考・判断・表現を行う場を設定したため、他者と協働しながら課題に取り組む姿を見ることができた。

▲　「遊びを教えてもらうこと」が、「他者との協働」となっているため、児童が体験した遊びの類似点・相違点を主体的に表現できる工夫を行う必要がある。

4. 授業者から

①　大空学園義務教育学校　１学年　松本　美佳　教諭

- 児童が日本の伝統的な遊びを学習した既習事項を活用し、世界の遊びとの類似点や相違点を主体的に見付ける活動の充実を図るため、時間配分を改善する必要がある。
- output活動の充実を図るため、自国と他国と比較をするためのシンキングタイムの時間にゆとりを持たせる必要がある。
- 学校の実態を生かし、ケニア国籍の保護者から、他国の日常の紹介があったため、自国との文化の比較を身近に感じることができた。
- 遊びを通して、使っている言葉や道具を体験したため、その国を知ろうとする意欲の向上が図られた。

②　大空学園義務教育学校　１学年　髙畠　瑠衣　教諭

- 日本の伝統的な遊びを地域の方に教えてもらう活動を経験したため、外国籍の方々から遊びを学ぶことについても落ち着いて行動することができた。
- 外国の遊び全てを経験することができなかったため、後日、グループ発表を通して、遊びのコツを知る活動を設定し、学びを深める必要がある。

5. 協議内容

【成果（〇）と課題（▲）】

①　グループ１　発表者：帯広市立光南小学校　郡山　曜　教諭

〇　遊びがより上手くできるようになるためのコツを言語だけでなく、主体的に身振り手振りを活用して、外国の方から知識・技能を学ぶ姿勢が図られていた。

〇　日本語が理解できない外国籍の友人にジャスチャーを用いて遊びのコツを伝える

など、コミュニケーション能力の向上が図られた。

○ 日本の伝統的な遊びを地域の方から学ぶなど、これまでの学習内容の確実な定着が図られていたため、本時のシンキングタイムでは、グループ内で「〇〇に似ていたね」など類似している点を的確にとらえることができた。

○ 自国と他国の文化の相違点等を感じながら、自分も相手も大切にする」という目指す児童の姿の実現に向け、ワークシートの工夫や授業構成の充実が図られていた。

▲ 「どうしたら、言葉が伝わらない国の人とも一緒に遊べるか」など、児童自らが、課題を発見し、活動を広げるなど、深い学びにつなげる必要がある。

② グループ２　発表者：大空学園義務教育学校　大草　泉　教諭

○ 地域の方々が児童に日本の遊びのコツを教えるという体験的な活動を取り入れていたため、児童が興味・関心を主体的に、よりよくできるようになるための遊びのコツを覚えようとする場面を多く見ることができた。

○ 児童が多様な他者と関わることのよさを理解するだけでなく、外国籍の方から遊びを学ぶ活動を「楽しみたい」という気持ちが表現されているなど、日常の生活から世界知り、つながる教育の推進が図られていた。しっかり落ちているので、外国の遊びと比較ができた

○ 教師が児童の核心に迫る発言を見逃さず、YES・Noカードを活用するなど、全体で共有する活動が適宜行われていたため、日本と外国の遊びの違いを明確に表現することができていた。

○ ７か国20名の外国籍学園生が在籍しているなどの実態を踏まえ、日頃から、異文化を受け入れる姿勢の育成を意識した学級経営が行われているため、聞く力の定着が図られていた。

③ グループ３　発表者：中札内村立中札内小学校　福原　誠之　教諭

○ 自国の昔遊びを知るという活動では、地域の方々からコツを教えてもらう体験的な活動を取り入れたため、「〇〇と似てる」とつぶやきが起こるなど、思考力・判断力の育成が図られた。

○ 自国の文化から他国の文化につなげる単元構成にしたため、児童自ら日本の遊びに似ている外国の遊びを選択・比較し、よりうまくなるコツを外国の方に質問するなどコミュニケーション能力の向上が図られていた。

○ 児童が本時の学習内容の振り返りで、ワークシートにシールを貼るなどの工夫を行ったため、「何がわかるようになったか」「何ができるようになったか」を明確にすることができた。

▲ ５つの遊びのうち３つを選択するという活動であったが、類似点・相違点を比較し対話的な活動を充実させるために、本時は、全ての遊びを体験する活動に時間をかける必要がある。

▲ 遊びのよりよいコツを伝えることは、１年生の発達段階で、感覚的な行動を言語化するのが困難なため、ICTなどを活用し、映像で共有を図る必要がある。

6. 助言者から

① 帯広市教育委員会　学校教育指導課　田隈　泰邦　指導主事

- 大空学園義務教育学校の研究主題である「互いの文化を尊重し、多様な世界で生きていく国際実践力の創造」の実現に向け、十勝地区国際理解教育研究会の研究理論と一致したことが、連携・協働を図りながら推進する研究大会となった。
- 昔からある遊びを題材にし、身近な人々と関わることへのよさや楽しさを体験する活動を取り入れ、世界とつながる活動に広げるという単元構成となっていたため、児童が自分事として課題解決を行う場面が多くみられた。
- 昔遊びを通して、地域の方々や外国籍の方々など多様な人々と触れ合うよさや楽しさを実感できる活動の充実が図られていたため、主体的にコミュニケーションをとり、知識及び技能を深める活動につなげることができていた。
- 昔遊びがより上手にできるようになるためには、コツをつかむことが必要になるため、自らそのためのキーワードを探す活動が、人に教えたり、人からに教わったりする機会となる。
- 体験した遊びを振り返るためのシンキングタイムを設けるだけでなく、比較をする時に、日本の昔遊びについて、言葉や絵を活用し、分かりやすく可視化されていたため、児童の思考・判断がスムーズに行われる工夫が図られていた。
- 「遊び」という身近な活動を深く学び・考えること通して、「家族」「友達」「地域の方々」「外国籍の方々」など多様な他者と協働し、広げることのよさや大切さを知るだけでなく、「自分ごと」としてとらえる活動につなげることができていた。

分科会Ｂ　第４学年　総合的な学習の時間「世界のごみ問題を考えよう」
　　第５学年　総合的な学習の時間「大空学園SDGｓはじめの一歩

【学習指導案（第４学年）】

第４学年　総合的な学習の時間（国際理解）　学習指導案

日　時　令和５年１１月２日（木）第２校時
児　童　４年Ｂ組　３０名
指導者　藤　原　　悠　大

１　単元名　世界のごみ問題を考えよう

２　単元について

不法投棄による環境汚染や、ごみ処理場の新増設に対する近隣住民の反対、焼却・埋め立てが追い付かない問題の総称を指す「ごみ問題」は現在、世界中で深刻化しており、日本でも問題視されている。ごみ問題によって生じる主な影響は、廃棄物処理に伴う温室効果ガスの排出や埋め立て地の不足、海洋プラスチック問題がある。日本の現状としては、国民一人につき１日に１キロのごみを排出していると言われている。また、国際廃棄物指標においての日本の総評は、ごみの量が他国と比べて少なく、適切に焼却処理を行えているが、リサイクル率が低いとされている。

本単元では、世界で起きているごみ問題を調べたり、日本で出たごみが世界の様々な場所に流れ着いていることを知ったりする中で、身近に出しているごみについて改めて考える機会としたい。そして、ＳＤＧｓ等の取り組みの中でこれからの将来を担っていく世代の子どもたちに、これからできることは何かを考えようとする態度を育てたい。

３　国際理解の目標

- ＢＡＳＩＣ－１（地理的項目－知識・理解）⇒【intake 活動】
  日本から出たごみが、世界各地に多く運ばれていることを知り、現状の問題点について知る。
- ＢＡＳＩＣ－２（文化・言語的項目－体験・経験）⇒【output 活動】
  日本や世界のごみ問題を調べた知識を活用し、身の回りでできることや様々な取組の共通点や相違点について考える。
- ＢＡＳＩＣ－３（情報発信・行動的項目－表現・意識）⇒【outcome 活動】
  世界の様々な取組を知ることで、将来への意思決定や行動に活かすようにする。

４　単元の目標

学習したことや調べたことを活用しながら、世界と日本が抱えるごみ問題についての理解を深め、身近な生活で出来ることを考える態度を育てる。

５　大空学園の研究にかかわって

研究仮説との関わりとしては、外国のごみ問題やそれに対する取組を日本と比較することで、外

国のごみ問題についての理解を深め、自国の取組へと生かしていきたい。また、自分自身や家庭、学校でできることを考える機会を設けることによって、より主体的に問題に取り組む態度を育てていきたい。

6　指導計画

学習段階	授業の展開	評価の手立てと観点 □評価　◆手立て
１次（１時間）	社会科のごみの学習と結び付けて、世界や日本のごみ問題の現状を知る。	□ふり返り
２次（３時間）	世界や日本のごみ問題について調べる。	◆インターネットや本などの資料を使って調べる。
３次（１時間） 【本時】	調べたことから、身の回りで出来ることを考える。	□発表・交流 □ワークシート
４次（２時間）	学習したことをもとに、新聞にまとめる。	□発表

7　本時の目標

○　世界や日本のごみ問題について調べたことを活用し、身の回りで出来ることを考える。

8　本時の展開

主な学習活動	□評価　◆留意点	●国際理解の活動
○単元の学習の流れを確認する。	◆外国と日本の現状を比較することで、外国への関心を高める。	●日本が出しているごみが世界の国々の中で多いことを知り、現状の問題点について知る。 【intake 活動】
○前時までの調べ学習で、わかったことや気付いたことを確認する。 ・世界ではごみによって様々な問題が引き起こされている。 ・自分たちの家から出るごみには、処分のしづらい物がある。	◆外国や日本が抱えるごみ問題は関係ないことではなく、自分たちの身近な取組から変えられることを理解する。	
【課題】調べたことをもとに、身の回りでできることを考えよう。		
○調べ学習で詳しく調べていたことをもとにグループをつくり、身近に出来ることについて考える。	◆大きな問題に対して自分たちにできることがあることに気付かせる。	●調べ学習をもとに、身の回りで出来ることについて考える。 【output 活動】

・むだな買い物はしない。 ・プラスチック製品の代わりになるものを使う。 ・リサイクルしやすいものを使う。		
○交流を通して、他グループのアイディアから取り入れ、自分のグループのアイディアを深める。	◆交流を通して、自分の考えの幅を広くもてるようにする。 □他グループの良いと思った考えを取り入れるだけでなく、なぜそう思ったのかを記録する。	
○グループで考えたことを発表する。	◆発表されたことをグルーピングすることで、他グループとの共通点や相違点に気付くようにする。	
○世界ではごみ問題に対して、どのような取組をしているのかを、資料を通して理解する。 ・自分たちが考えた取組に似ている部分があった。 ・この取組ならこの問題を解決することができる。		●世界の様々な取組を知ることで、将来への意思決定や行動に活かすようにする。 【outcome 活動】
【まとめ】自分たちの行動は、世界の問題解決につながっている。		
○本時のふり返りを行う。		

【学習指導案（第５学年）】

第５学年　国語科・総合的な学習の時間（国際理解）　学習指導案

日　時　令和５年１１月２日（木）第３校時
児　童　５年A組　２６名・５年B組　２６名
指導者　西　村　　弦・河　瀬　　結

１　単元名　大空学園ＳＤＧｓ　はじめの一歩

２　単元について

本単元は、日本におけるＳＤＧｓの達成度に目を向け、課題となっている項目の達成度を高めるための手立てを考え、学園・地域・家庭で実際に提案・実践を進めていく。また国語科と総合的な学習の時間で教科横断的に自分の学園をより良くする取組を通して、持続可能な世界をつくる行動者としての第一歩を踏み出す姿を目指す。

本学年は学年全体として落ち着いた学園生活を送っており、学習に対しての意欲も高い。またエジプト国籍の学園生が２名在籍しており、日常的に世界の文化や言語に触れられる環境で過ごしている。第４学年の総合的な学習の時間にＳＤＧｓの概要について調べ、新聞にまとめる活動をしており、本単元を学ぶ環境は非常に恵まれている。

一方で、自己調整力に課題があり、自分で課題を見つけたり調べたりする活動に戸惑いを感じる学園生が多い。例えば、国語科の定期テストの振り返りアンケートでは、「勉強はしているが、結果につながっていない」と感じる学園生が半数以上にのぼっている。つまり意欲はあるが、学び方がわからなかったりメタ認知できなかったりという課題に直面しており、この傾向が進級に比例して強くなることを危惧している。

本学園では、第５学年より教科担任制を導入しており、４月からの半年間でもそのメリットは学園生も指導者も十分に実感している。まず、複数の指導者が学園生に関わることによる安心感の高まりが挙げられる。そして指導者が担当教科の教材研究に専念し、より質の高い教科指導に必要な授業準備ができる。さらに、同内容を複数回指導することで、授業に対する学園生のさまざまな反応や理解度を把握しながら、次の授業に向けて改善を重ね、さらに質の高い授業につなげることも可能である。

一方、教科担任制になると、他教科の進捗状況や学園生の様子を把握しにくく、教科等横断的な学びの積み重ねが難しい。本単元では、これらのメリットとデメリットを再認識し、国語科と総合的な学習の時間との連携を取りながら、教科等横断的な学びを通して、学び方を身につけ、実践的な活動に取り組み、自己調整力の向上を目指していく。

これらを達成するために、本単元では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を目指していく。「個別最適な学び」を進めるには、学び方の習得と自分の考えをもつことが重要である。課題選択の場面を設定し、一人ひとりの興味関心にあった課題だったとしても、どのように取り組めばよいかわからなければ、学習意欲が減退してしまう。課題だけではなく、「最適」な学び方が

あって初めて「個別最適な学び」は成立すると考える。そこで本単元では、課題選択の前段階で共通課題に取り組み、調べ方やまとめ方、発信の方法などを全体で指導する。この過程を経ることによって、学園生一人ひとりが自信と安心感をもって選択した課題に取り組みやすくなる。また、共通課題の段階で、学園生の実態把握ができ、授業計画の改善にいかすことも可能である。この部分は、国語科「たがいの立場を明確にして、話し合おう」「資料を用いた文章の効果を考え、それをいかして書こう」の２単元を中心に学習を進める。

「協働的な学び」については、より多くの視点や考えと出会う場づくりとして、様々なグループ分けで活動を進める。活動内容によっては指導者が意図的にグループを構成する場合もあるが、できる限り学園生の自律的な動きを目指している。「個別最適な学び」を通して出てくる疑問や困り感を解決する過程で、他者とつながることの価値を実感させることがねらいである。こういった自立的要素の強い「協働的な学び」が、自己調整力を高めるために有効な刺激になると考えている。

本時では、課題内容、進行状況、活動規模など一人ひとりが「違う」学習状況が想定される。学園生が自己調整しながら活動する姿を目指し、自立的な活動が困難な学園生には省察したり一歩踏み出したりできるようサポートを進めていく。具体的な手立てとして、進行順や取組方法、お互いの状況が把握できるように掲示したりデータを共有したりする。また、学園生の活動をより活性化につながる指導ができるよう指導者間の情報共有を徹底して授業に臨む。

３　国際理解の目標

- ＢＡＳＩＣ－１（地理的項目－知識・理解）⇒【intake活動】
  SDGs の概要や日本および諸外国の取り組み状況を知り、その主たる要因を理解する。
- ＢＡＳＩＣ－２（文化・言語的項目－体験・経験）⇒【output活動】
  諸外国と学園の実情を調査・比較することで、自分事としてSDGsと向き合い、様々な価値観を体感・実感することができる。
- ＢＡＳＩＣ－３（情報発信・行動的項目－表現・意識）⇒【outcome活動】
  自己選択した課題を学園で達成するために、諸外国の取組を調べ、それらを手掛かりに、提案・実践・調査を繰り返し、持続可能な世界をつくる行動者としての第一歩を踏み出す。

４　単元の目標

（１）　単元全体の目標

自分の学園をより良くする取組を通して、持続可能な世界をつくる行動者としての第一歩を踏み出す。

（２）教科・領域ごとの目標

	知識・技能	思考・判断・表現等	主体的に学びに向かう態度
国語科	○情報と情報の関係づけのしかた、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。	○目的や意図に応じて、日常生活の中から課題を決め、集めた材料を分類したり関係づけたりして、伝え合う内容を検討することができる。 ○互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすることができる。 ○引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。 ○目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりすることができる。	○粘り強く互いの立場や意図を明確にしながら、学習の見通しをもって、身の回りの問題を解決するために調べたり話し合おうとしたりしている。 ○粘り強く文章と図表などを結び付けて読み、学習の見通しをもって、読み取った筆者の工夫をいかして、統計資料を用いた意見文を書こうとしている。
総合的な学習の時間	○学園や地域の現代的な課題及びそれに携わる人々の願いがわかる。	○学園や地域の人々等の思いを踏まえて課題を設定し、解決方法や手順を考え、見通しをもって追及できる。 ○視点を明確にして、事実や関係と整理した情報を関連付けたり、多面的に考察したりして理解し、多様な情報の中にある特徴を見つけることができる。 ○学習の仕方を振り返り、学習や生活にいかすことができる。	○課題解決に向けて、他者と協働して探究活動に取り組み、その大切さに気付く。 ○探求活動を通し、自分と実生活・実社会の問題解決に取り組もうとする。

５　大空学園の研究にかかわって

本単元では、日本のＳＤＧｓにおける課題となっている項目を解決策のひとつとして、すでにその項目を達成している諸外国の取組を参考にする。その際に、日本でもその取組が有効であるかを考えたり、文化の違いから日本に適しているかを判断したりする場面が想定される。その過程で、自国の文化と自国と異なる文化を比較したり異文化を認めたり自分の文化の価値に気づいたりできるようにする。

また、単元後半では、学園・地域・家庭に対して実際に提案・実践・調査・改善を進める活動を行う。自分たちが考えた提案や取組を改善する機会が保障されることで、根拠となっていた自分の考えや行動を省察する場面が想定される。このように、「自分にできること」を考える場面を意図的に設定することによって、主体的に国際社会に参加しようとする態度をもつことができるように

する。

これらの活動を通して、自国の文化を大切にすると共に異文化や多様性を尊重し、主体的に行動しようとする学園生の育成を目指す。

６　指導計画

<table>
<tr><th>学習段階</th><th>授業の展開</th><th>評価の手立てと観点
□評価　◆手立て</th></tr>
<tr><td rowspan="2">１次
8時間
（国語６総合２）
（知る）</td><td>・活動の基盤となる情報を全体で確認する。</td><td rowspan="5">□学習活動の過程や成果を記録したデータによるポートフォリオ評価
（google ドキュメント・スライド・フォームなど）

◆共通課題に取り組むことで、児童の実態を把握し、３次での学習支援をより具体化する。

◆自己選択することで、活動への意欲を高めると同時に、交流場面では様々な視点に触れる機会を保障する。</td></tr>
<tr><td>・共通課題に取り組み、全体で課題解決の流れや手立てを学ぶ。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">２次
10時間
（国語６総合４）
（考える）</td><td>・選択した課題に取り組む。
①　日本の現状を詳しく調べる
②　日本の対応策を調べる
③　達成国の現状や取り組みを調べる
④　日本の現状解決に向けた手立てを考える</td></tr>
<tr><td>・調べた内容を共有する。
・共有した情報をもとに、学園や家庭、地域で自分ができる取組・発信を考える。</td></tr>
<tr><td>３次
10時間
（国語２総合８）
（伝える）
【本時】</td><td>・情報をもとに考えた取組を校内、家庭、地域に発信し、意識の向上や課題解決を目指す。
・提案→実践→分析→改善を繰り返し、よりよい活動を探求する。</td><td>□実際の活動の様子によるパフォーマンス評価
（google ドキュメント・スライド・フォームなど）

◆実践を振り返り、改善する時間を確保することで、粘り強く取り組んだり、自分を見つめ直したり意識を高める。</td></tr>
<tr><td>４次
２時間
（総合２）
（つなげる）</td><td>・活動を通して、何に気づき、何を得たのかをふりかえる。</td><td>□ふりかえりシートによる自己評価及び相互評価
（google ドキュメント・スライド・フォームなど）</td></tr>
</table>

		◆学習活動での学びが、どのような場面で高めたり生かしたりできるかを、具体的にイメージすることで、学びの価値を高める。

7　本時の目標

○　学園や地域の人々等の思いを踏まえて課題を設定し、解決方法や手順を考え、見通しをもって追究する。

8　本時の展開

主な学習活動	□評価　◆留意点	●国際理解の活動
○前時まで取組状況を確認する。 ・課題の種類 ・進行段階 ・活動規模 ・活動メンバー ○本時の取組内容を確認する。	◆進行順や取組方法、お互いの状況が把握できるように掲示したりデータを共有したりする。	
【課題】世界につながる第一歩として、学園・家庭・地域で提案・実践・改善を繰り返し、意識の向上につなげよう。		
○それぞれの取組を進める。 ・対象の実態を調査する ・提案内容を考える ・提案方法を考える ・提案する ・調査する ・分析する ・改善段階を考える ・改善策を考える ・再提案する	◆個々の取組状況に必要な情報をデータで共有しておく。 □調べた知識や情報を活用し、提案・実践・改善に取り組んでいる。 （実際の活動の様子によるパフォーマンス評価）	●自己選択した課題を学園で達成するために、諸外国の取組を調べ、それらを手掛かりに、提案・実践・調査を繰り返す。 【outcome活動】
○指導者が構成したグループで、お互いの取組状況を報告・協議する。	◆より多くの情報を共有するために、指導者が計画的に構成したグループで行う。	●お互いの取組状況について報告・協議し、よりよい手だてを探る。 【output活動】
【まとめ】お互いの実践や反省から、より効果的な提案にいかせる視点・手だてを整理し、次の活動の見通しをもつ。		
○振り返りシートに記入する ・ＳＤＧｓに関する気づき ・取組の手立てなどに関する気づき		●お互いの取組から、自分の実践にいかせる内容を整理する。 【intake活動】

【分科会Ｂから】

1．intake・output・outcome活動を通して育成する国際実践力の育成

① 第４学年　総合的な学習の時間「世界のごみ問題を考えよう」

intake活動・output活動・outcome活動を通して国際実践力の育成が図られていた。			
そう思う	58%	どちらかといえばそう思う	37%
あまり思わない	5%	思わない	０%

- 知識だけではなく世界の問題と照らし合わせながら、身近な問題と捉え自分達ができることを対話を通して考えられていた。
- ICTを活用し、国際理解の目標に迫っていた。発達段階に応じた児童の思考が見られた。
- 自分たちができることをoutcome活動で話していたが、取り扱うごみ問題があまりに大きすぎて本当に自分ごととして捉えられていたのかが疑問に感じた。
- 同じクラスで生活している海外から来ている仲間の国で行われている取り組みを知らせる事で世界をより一段身近に感じることができた。

② 第５学年　総合的な学習の時間「大空学園SDGｓ　はじめの一歩」

intake活動・output活動・outcome活動を通して国際実践力の育成が図られていた。			
そう思う	65%	どちらかといえばそう思う	35%
あまり思わない	0%	思わない	０%

- 内容的にたくさんの資料、情報をかき集めintakeできていた。
- 本時では、学園や地域を対象とした活動だったが、そこに至るまでに世界の状況、日本の状況とより具体的に取り組むことによって、outcome活動の自立した協働的な学びの姿につなげることができたと感じた。
- 5年生にとって難しい取り組みかと思っていたが、上手にoutcome活動に向かっていた。
- ３つの活動が生まれる土台として、子どもが自走できる授業システムが秀逸だった。求める子どもの力を自己調整力というキーワードで落とし込み、日々授業をされていることが素晴らしかった

2．学びのゴール　世界に対して「何ができるか」を共に考え、創り上げる

① 第４学年　総合的な学習の時間「世界のごみ問題を考えよう」

「世界に対して『何ができるか』を共に考え、創り上げる」児童生徒の学びの姿の育成が図られていた。			
そう思う	58%	どちらかといえばそう思う	37%
あまり思わない	５%	思わない	０%

【成果（○）と課題（▲）】

○ 行動化につながるところまで見られて良かった。世界に対してというよりも身近な生活改善に重きを置き、発達段階に応じた実践が図られた。

○ 自分たちの身近なことから少し大きな規模の方策まで、各グループともよく考えることができた。

▲ 1人1人の生活経験に委ねられることが多く、創り上げるというところまでには至ってないと感じた。発達段階として自分達の取組が世の中に役になるなどの理解が得られるまでの話し合いの時間を保障する必要がある。

② 第５学年　総合的な学習の時間「大空学園SDGｓ　はじめの一歩」

「世界に対して『何ができるか』を共に考え、創り上げる」児童生徒の学びの姿の育成が図られていた。			
そう思う	70%	どちらかといえばそう思う	30%
あまり思わない	0%	思わない	0％

【成果（○）と課題（▲）】

○ 自分ごととして選択したSDGsのテーマに沿った課題解決を共通のテーマの仲間と協働しながら行うことができた。

○ 身近な様々な問題に対して考える中で、それぞれの課題の解決策に取り組むことで、課題解決の道筋や方法を学ぶことができた。

▲ 世界というスケールの大きさをどれくらい自分ごととして考えていけるかが難しいと感じた。子どもたちの考えるできることの積み重ねが、世界を変えることに繋がっていると感じられるような価値づけをする必要がある。

3. 学びのゴール　他者と協働して主体的に課題を解決する

① 第４学年　総合的な学習の時間「世界のごみ問題を考えよう」

「他者と協働して主体的に課題を解決する」児童生徒の学び姿の育成が図られていた。			
そう思う	42%	どちらかといえばそう思う	47%
あまり思わない	11%	思わない	0％

【成果（○）と課題（▲）】

○ 教室のいたるところで協働的な学びに取り組むことができた。

○ 班での話し合い活動が意欲的に行われており、日常からの取組を感じることができた。

▲ クロームブックの扱いは素晴らしかったが、より課題解決に迫るために子どもたちによる生の対話を行う必要がある。

▲ より「他者と協働して主体的に課題を解決する」ために「他の友達の話も聞きたい！」「聞かないと解決しない」などの意識を高める必要がある。

② 第５学年　総合的な学習の時間「大空学園SDGｓ　はじめの一歩」

「他者と協働して主体的に課題を解決する」児童生徒の学び姿の育成が図られていた。			
そう思う	83%	どちらかといえばそう思う	17%
あまり思わない	0%	思わない	0％

【成果（○）と課題（▲）】

○ 共同編集を使って１つのポスターを作ったり、成果報告の中で、質問を重ねて行動を具体化したりすることで協働的に学ぶことができた。

○ マネジメント力が高く、授業で子ども達の十分な活動時間や効果的なICTツールの活用が図られていた。

○ 話し合うことによって新たなヒントを得て改善することができた。

4. 授業者から

① 大空学園義務教育学校教諭　４学年　藤原　悠大　教諭

- 「水について」「ゴミについて」の二部構成からなる単元で授業を進めてきた。それぞれを４つのプロセスで構成した。
- 世界のごみ問題に触れる機会を作ることで、子ども達が今まで知らなかった事実を知り、その事から考えられる課題を自分になりに捉えて授業に臨む姿が見られた。
- 児童自身が調べる活動を経て、児童たちなりのアイデアを出した。今後はそれを国語科で学習した新聞等で発信し、学園の児童生徒に興味をもってもらえるように取り組んでいきたい。
- ICTを活用することで、表現の苦手な子も積極的に他者と協力しようとする姿が見られた。

② 大空学園義務教育学校　５学年　西村　弦　教諭

- ５年生は中等部になり、教科担任制など生活に変化が多い学年なので学習の中で自己調整力の育成を図り、自分たちで考えて動く活動を多く取り入れた。最初はどう動けばいいか分からず難しさを感じていたため、個々の課題に取り組む前に全員で一つの課題について考える活動を通して課題への取り組み方をレクチャーした。
- 最初は教師への質問が多かったが、徐々にgoogleサイトなどを活用し、教師に聞かずに自分でできる工夫などが見られた。
- 「世界に対して『何ができるか』」を考え、創り上げること自体はひとつの理想と感じてている。遠い存在を意識しながらも、自分の隣の人にできることをやっていくというスタンスが、人から人へとつながっていき、結果的に世界につながっている、という考え方で単元を進めてきた。「世界に対して」＝「外国に働きかける」だけではないのでは？という視点も検証していただきたい。

③ 大空学園義務教育学校　５学年　河瀬　結　教諭

【外国籍の児童の関わりについて】

- ５学年には、来日したばかりのエジプト国籍の児童が２名在籍している。児童は低学年の頃から様々な国の児童と関わってきた経験があるため、授業内で積極的に交流することができていた。日本語が不十分な場合は、大人も子供も翻訳サイトなどを用いて適宜支援することで抵抗なく授業に臨めていた。
- 外国籍児童はラマダン（断食）やお祈りの時間など、生活様式も日本人児童とは異なる部分がある。日常から文化の違いなどを５年生児童は感じる場面が多い。
- 外国籍児童の個別指導は「国語」と「社会」を行っている。本単元では一緒に学習を進めた。

5. 協議内容

【成果（〇）と課題（▲）】

① グループ１　発表者：大樹町立大樹小学校　石川　諒　教諭

〇 主体的に取り組むために、数値等の具体を用いることで、より明確な疑問点に気づくことができた。それが児童の主体性に繋がっている実践が図られた。

〇 学習を積み重ねるプロセスが素晴らしく、子ども達も見通しを持ち自信をもって活動することができた。

▲ 世界に対して何ができるかを考える前提として、自分が周りにどう働きかけるかを考えさせる活動も取り入れる必要がある。

▲ 個々で課題について取り組んでいるが、対話の時間の際に、個々がつながりを持って課題に取り組ませるために、SDGsの項目同士のつながりを意識させる必要がある。

② グループ５　発表者：帯広市立稲田小学校　飯田　道夫　教諭

〇 授業で学んだことをこれからの生活に生かしていくことが出来る工夫が図られた。

〇 ５年生の授業では、intake活動が児童にとって良い活動であった。その結果、最後まで自分ごととして課題を捉えることができた。

〇 ただ発表するだけでなく、発表を聞いて質問することができていたのが素晴らしかった。「発表する」という目標設定ができていたからこそ児童の良さを引き出すことができた。

▲ Outcome活動における話し合い活動とまとめの活動のバランスを調整する必要がある。

③ グループ7　発表者：帯広市立啓北小学校　高平　昂太　教諭

○ 本時で実りのある活動ができたのは、今までの良い準備があったからこそだと思った。より現実味を出すために、「実生活」と「世界」の間に「地域」を踏まえる取組をすることで子ども達の思考を深めることができた。

○ 本時の終末に自分の行動が世界に繋がっているということを児童に意識させることができた。

○ タブレットの共同編集機能等を用いて、児童同士のつながりを持たせることができた。

▲ ICTの活用場面でより活動が充実するために、対話の活動の際にjamboardを工夫して活用する必要がある。

6. 助言者から

① 北海道教育庁十勝教育局　義務教育指導班　水野　宏美　主任指導主事

- 外国籍児童へのサポートが良かった。日々の対話があるからこそ多様性を認める素地が図られた。
- 学習対象との関わり方の出会わせ方の工夫がみられた。どんな児童を育てたいのか明確にしていて良かった。本単元では、世界との「ズレ」や「隔たり」を感じさせることが大事であり、それらを明らかにして課題に向かうことで学習対象への「憧れ」や「可能性」を感じることができた。
- 課題の理解から実生活における課題解決に向けた行動につながる単元の構成だった。
- 課題に対するまとめを知識だけではなく、行動に移そうとする過程を踏まえることで、よりグローバルな視点を持つことができた。

② 北海道教育庁十勝教育局　義務教育指導班　安田　英憲　指導主事

- 世界の問題を自分ごととして捉えることができていた。常識にとらわれることなく、アンケート等を用いて、自分たちで自己を批評することができていた。その結果、地球規模の課題を学校・地域の課題として捉えることができていた。
- 主体的に国際社会に参加しようとする態度がみられた。課題解決に向けて、どうアプローチするか自ら選択することができていた。
- 本単元の最初にレクチャーしたことと国語科と総合的な学習の時間による合科的な学習によって、学習に向かう豊かな素地が形成されており、本時の主体的な学習が生まれた。その中で、大きな課題から身近な小さな課題に出会わせる工夫があった。全体を通して、実生活に生かすことが出来る実践的な取り組みだった。

分科会C
第７学年　理科「光による現象」
第８学年　総合的な学習の時間「総合福祉デザイン～自助具を製作しよう～」

【学習指導案（第７学年）】

第７学年　理科　学習指導案

日　時　令和５年１１月２日（木）第３校時
生　徒　７年Ｂ組　２５名
授業者　増　田　　美　次　郎

１　単元名　第１分野「光・音・力による現象」　第１章　光による現象（啓林館　p206-227）

２　単元について

学習指導要領において本単元の目標は、『ア　身近な物理現象を日常生活や社会と関連付けながら、次のことを理解するとともに、それらの観察、実験などに関する技能を身に付けること。イ　身近な物理現象について、問題を見いだし見通しをもって観察、実験などを行い、光の反射や屈折、凸レンズの働き、音の性質、力の働きの規則性や関係性を見いだして表現すること。』と記載されている。光がある、音が聞こえる、物が動くなど、身近な現象であるために「当たり前」になっていることを改めて問い、学んでいく。

光の性質の学習では、光の「直進・反射・屈折」の規則性を学ぶ。太陽光や鏡、虹など身近な現象を例に挙げ、その仕組みを問うことで、光の性質に注目させる。光の性質には、どのような規則性があるのか、観察、実験を通じて見いだし、身近な現象の仕組みについて考え、表現する。

７年Ｂ組の生徒は、授業に対して意欲的な生徒が多い。授業内容に関する知識や情報にも関心が高い。実験、観察においても、一人ひとりが丁寧かつ真面目に取り組むことができる。なお、光の性質について授業前の知識を確認した際には以下のような記述がされた。

・まっすぐ進む　・明るいところでは集結している　・光は人間よりも早く進む　・光速
・１秒に地球を何周もできるぐらい早くすすむ　・光がすべて反射して見える　・光のおかげで色が見える
※屈折について記述したのは 25 人中１人
・透明のものではそのまま進み、レンズに通すと光が屈折し光がまがる

上記のように光の単元に関しては不確かな知識が多かったので、身近な現象を題材にして、実験で確認するように、時間をかけて指導することにした。今回の光の屈折の学習も３時間構成で設定した。本時はその１時間目である。１時間目では虹を例に光が色ごとに分かれる現象を体験する。光の屈折に対する関心を高め、２時間目に実験からその規則性を見いだし、３時間目に光の進み方について作図を用いて確認する。入射角と屈折角の関係は、混乱を招きやすいので、３時間目にはメタファーを使いながら、説明する。

３　国際理解の目標

● ＢＡＳＩＣ-１（地理的項目－知識・理解）⇒【intake活動】
世界の虹の見え方を提示し、世界で虹の見え方が異なることを理解する。

● ＢＡＳＩＣ-２（文化・言語的項目－体験・経験）⇒【output活動】
分光器の作成および屈折の実験を通じて、虹が見える原理について考える。

● ＢＡＳＩＣ-３（項目－情報発信・行動的体験・経験）⇒【outcome活動】
虹が見える原理が同じでも、世界では見え方が違うのは、その色を表す言葉がなかったりするからである。世界で共通する科学と、その土地での捉え方である文化のちがいがあることを意識させる。

４　単元の目標

①光が水やガラスなどの物質の境界面で反射、屈折する時の規則性を見いださせる。
②世界共通のものである科学と、世界で異なるものである文化に注目させることで、価値観を広げ、他者と協力し、主体的に行動しようとする意欲と態度を育成する。

５　大空学園の研究にかかわって

大空学園の研究では、「異文化を認めること」や「異文化や多様性の尊重」を目指す子ども像としている。同じものでも見る人の文化によって捉え方が異なるという例を通じて、価値観を広げる一助としたい。

６　指導計画

	学習内容	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	光源 光の直進 光の反射 光の屈折 ものが見えるしくみ	光には直進、反射、屈折の３つの進み方があることを理解している。		身のまわりにある光を利用しているものを考えている。
2	反射の法則 入射角＝反射角	入射角を変えた時の反射角を測定することができる。		入射角を変えた時に反射角がどう変化するのか、繰り返し実験を行い調べている。
3			反射の法則を使い、問題を解くことができる。	
4	像 光の道すじの作図	鏡で光が跳ね返る時の規則性を理解している。	像の位置を考え、光の道すじを図で表現することができている。	
5 本時	光の色 屈折の規則性 〈空気→ガラス・水〉	白色光には様々な色が混ざっていることを理解している。		虹の原理と世界での見え方について学び、ものの見方を広げることができている。

6	入射角＞屈折角 〈ガラス・水→空気〉 入射角＜屈折角 全反射 光の道すじの作図	入射角を変えた時の屈折角を測定することができる。		入射角を変えた時に屈折角がどう変化するのか、繰り返し実験を行い調べている。
7			光の屈折の規則性を使い、問題を解くことができる。	
8	焦点、焦点距離 光軸 実像、虚像 光の道すじの作図	凸レンズと物体の距離によって像の位置や大きさ、向きが変わることを調べることができる。		物体の位置を変え、繰り返し実験を行い、像の大きさや向きの規則性を見いだそうとしている。
9		凸レンズを通る光の進み方を作図で表すことができる。		

7　本時の目標

○　白色光には様々な色が混ざっていることを理解している。

○　虹の原理と世界での見え方について学び、ものの見方を広げることができている。

8　本時の展開

○主な学習活動	□評価　◆留意点	●国際理解の活動
○前時の学習の小テスト ○課題の把握	□知識・技能	
【課題】　なぜ虹が空に見えるのか。		
○虹を思い出し、色の順番を思い出す。 ○プリズムで光が分かれる様子を見る。【演示実験】 ○ペットボトルと水で虹を作る。【演示実験】	◆正確に思い出す必要はない。アイスブレイクとして行う。	●実験を通じて、光にはいくつか色があること、光は屈折することを学び、虹ができる仕組みを考える。 【output 活動】
○分光器を作成し、観察する。見えた色をワークシートに記入する。【生徒実験】	**【実験】分光器の作成と光の観察** ①紙コップの底に小さな穴をあける。 ②底面に１㎝四方の分光シートをはる。 ※１人１個作成する。	
○見えた色を交流する。	◆他の人の見え方に注目させる。	
○課題について考察し、交流する。	◆Google Jamboard の活用	
○原理の説明とワークシートへの記録	虹が見える原理 雨粒に当たった光が雨粒の中で屈折と反射する。光によって屈折率が異なり、色ごとに分かれる	●虹が見える原理（科学）は同じだが、見え方（文化）は異なることを学び、価値観や異文化に対する視野を広げる。 【intake 活動】
○世界の虹を紹介する ○同じ原理でも、見える色が違う理由を考える。	色が違う理由 ①表現する言葉がない ②色に対するこだわりのちがい	

○本時で学習したことを自分の言葉でまとめる。	□知識・技能 □主体的に学習に取り組む態度	

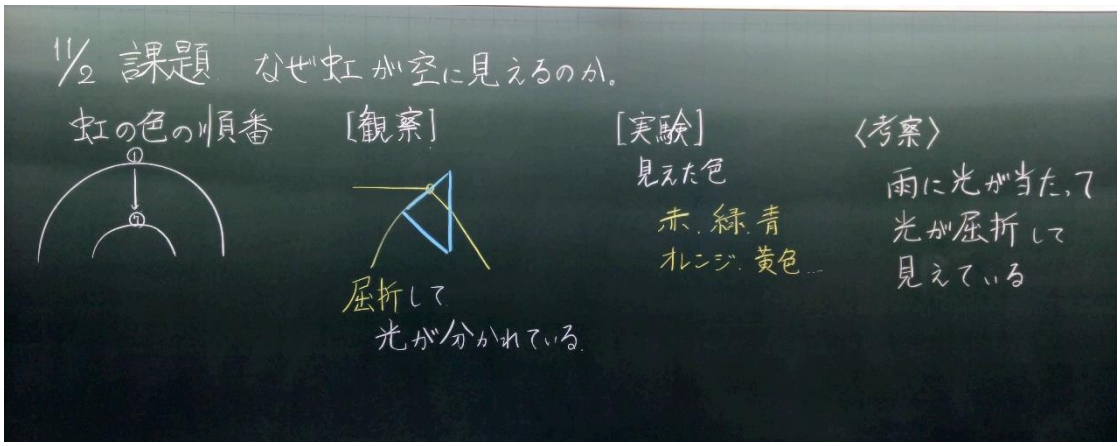
【まとめ】（例）
・光の中には様々な色が混ざっている。
・ものを通すと光の色は分かれる。それが見えているのが虹。
・人によって見え方が違う。それを知るのも大切だと思った。

※授業資料

モニター①（虹の画像）

モニター②（世界の虹の比較）

板書計画

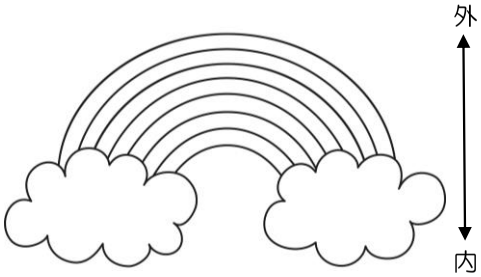


ワークシート

No. X　光の色（p. 218-219）令和５年　　月　　日　　７年　　組　　番　　名前

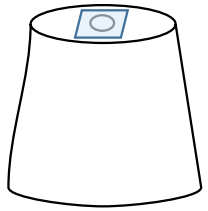
課題

【問】虹の色、外側から順に答えなさい。



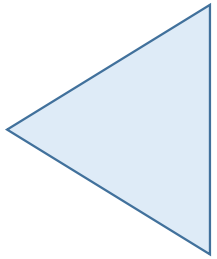
【実験】分光器を作成し、光の色を観察する。

①紙コップの底に小さな穴をあける。
②底面に１cm四方の分光シートをはる。



何色が見えた？

【観察】プリズムに光を当てた時の様子を記録する。



〈考察〉観察と実験の結果をもとにした上で、課題に対するあなたの考え

☆まとめ《今日わかったこと、大切だと思ったこと》

☆Help《今日わかりにくかったこと、疑問に思ったこと》

【学習指導案（第８学年）】

第８学年　総合的な学習の時間　学習指導案

日 時　令和５年１１月２日（木）第２・３校時
生 徒　８年Ａ組　２３名・８年Ｂ組　２４名
指導者　上野　嗣弥・神下　朋実・尾崎　弥生
（技術）　・　（美術）　・　（国語）

１　単元名　「総合福祉デザイン～自助具を製作しよう～」

２　単元について

現在、STEAM 教育の推進が求められている。Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Arts（狭義では芸術、広義ではLiberal Arts（リベラル・アーツ））、Mathematics（数学）の頭文字を取ったものである。これらの内容を相互に行き来し、各教科で学習した内容を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教育がSTEAM教育と定義されている。また、カリキュラムマネジメントの一側面である教科横断的な視点としても教科の枠を超えたカリキュラムデザインが必要となっている。

昨年度、教科の内容に類似性のある技術科と美術科を横断し、その知識・技能を用いながら、問題解決的な学習を設定できないかと考え、自助具とよばれる福祉用具を３D プリンタで製作する授業を実践した。美術科での「デザイン」の授業と、技術科での「情報技術・工学」の授業を基礎としながら、総合的な学習の時間でそれらを活用し、問題解決のプロセスを学ぶことができる内容である。今年度については、それらに加え、プレゼンテーションの知識・技能をより高めるという視点で、国語科とも連携しながら、授業を構築してきた。

美術科では、デザインが『使う人のためにされる』ということを前提に「ユニバーサルデザイン」の考え方である、大人でも子供でも、障がいがある人もない人も、どんな国籍の人でも一目で見て使い方が分かり、「誰でも使いやすいデザイン」を学習した。

その後、校内にあるユニバーサルデザインを発見する活動を行い、小中学生が一緒に生活するという特徴や、外国籍の児童生徒が多いという特徴のある本校には「誰でも使いやすい」「日本語を理解していなくても分かる」デザインが多用されていることを発見することができた。

本来自助具は、障がいや病気で生活上の困難を抱えた方に対し「生活上の困難を少なくして自力で生活するために作られるその人に寄り添った道具」を指し、「その人」の状況に焦点を絞って製作するものである。しかし、障がいや困難を抱える方のために作った自助具は、健常者が使用しても快適であるものが多い。発表会での意見、振り返りなどでその事実に気づかせることと、「ユニバーサルデザイン」の事前の学習によって、一度焦点化された視点を「世界」に向けて広げることができると考えた。

生徒の実態としては、７学年の時に、技術科の「材料と加工に関する内容」という学習の中で、３DCAD ソフトである Tinkercad を利用し、タブレットを便利に使うための製品を木材を用いて製作した経験をしている。しかし、３次元の物の見方は十分に育ってはおらず、Tinkercad の扱いにも非常に苦労している生徒が多かった。また、発言や発表についても、一部の活発な生徒が発言し、他の生徒はなかなか発言できない様子も見られた。

８学年に進級し、日常の指導や本授業を通して、活発な話し合い活動や、発表活動、問題解決学習に取り組み、３次元的な物の見方や発想力、デザイン力、コミュニケーション能力を高めることがで

きた。その集大成としての発表活動ということもあり、生徒には自信をもって発表をできるよう準備を行わせたい。

３　国際理解の目標

● ＢＡＳＩＣ－１（地理的項目ー知識・理解）⇒【intake活動】

言語が違っても、文化が違っても、年齢や性別など多種多様な人が一目でみてわかるようなデザインが「ユニバーサルデザイン」だと理解し、限定的な「バリアフリー」と、より多様な「ユニバーサルデザイン」の考え方や違いを知る。

● ＢＡＳＩＣ－２（文化・言語的項目ー体験・経験）⇒【output活動】

誰もが使いやすいデザインを見つける活動を通して、自分の学校に生活している小学生や外国籍の児童生徒にも使いやすいデザインになっていることを発見・理解し、『使う人のためにデザインする』というデザインをするための視点の重要性について理解する。

自分の担当する患者さんの病状や障がいの状況に合わせて自助具を設計・製作することを通して、グループ間内での意見交流の重要性や「その人を思いやりながら」デザインをする重要性に気付く。

● ＢＡＳＩＣ－３（項目ー情報発信・行動的体験・経験）⇒【outcome活動】

製作した自助具を、プレゼンテーションで紹介し、感想や意見、自分たちの振り返り活動を行う。

一連の活動を通して、「ある特定の人に向けて作った自助具」が、「健常者の私たちも使いやすいもの」であることに気づかせる。結果『ユニバーサルデザイン』の考え方に帰着する。

４　単元の目標

自助具を求める人たちの障がい・病態に応じたデザインを自分自身で考え、誰にでも使いやすいデザイン（UD）を理解し、３DCAD や３D プリンタを用い、オリジナルの自助具を作成し、その意図や仕組みについて、図や写真などを使って効果的に発表することができる。

５　大空学園の研究に関わって

【必要感のある課題と展開】

本授業は一貫して「日常生活で困っている人のための『自助具』を作り上げる」という課題を追求し、その人のためにどのようなデザインをすればよいか、そのために３D プリンタをどう活用すればよいのかを探究してきた経緯がある。学校教育の抱える課題として、「設定された課題が社会とのつながりが薄い」というものがあり、なかなか必要感がある課題提示ができないことが多い。しかし、今回は自分たちが製作した自助具が実際に人のために役立つという「社会とのつながり」が深いものとなっており、必然的に「自分事」の必要感のある課題として生徒もとらえることができている。

【根拠をもった思考の広がり（話し合い・まとめ）（教科部会③で設定）】

美術科でのデザインの授業を通し、デザインをどのように作り出していくのかということや、そのデザインを発表した際のフィードバック、実際に３D プリンタを利用して自助具を印刷した後など、様々な場面で生徒自身が互いに話し合いを行いながら課題解決に向けて活動を行った。その際には、どう改善すべきかを論理的に伝えたりしながら、根拠をもって話し合う様子が見られた。本時では、それらの学習した内容を端的に分かりやすく根拠をもった内容となるようまとめさせ、発表させたい。

６　指導計画

時間	学習活動（教科）	評価の観点等
2	・Tinkercad（３DCAD ソフト）の使い方と３Dプリンタの使用方法（技術）	【知①】（Tinkercad のファイル、ワークシート） ・Tinkercad を利用して３Dの製作物を作成できている。
1	・福祉用具体験（総合）	【態③】（行動観察・ワークシート） ・福祉用具の説明や体験に意欲的に参加している。
2	・ユニバーサルデザイン（UD）の学習（美術）	【知②】（ワークシート） ・UD について理解することができている。
1	・求められている自助具の説明（総合）	【知③】（ワークシート） ・自助具の利用者の障がい・病態についてメモをし、どのようなものが必要か理解できている。
2	・求められている自助具のアイディアスケッチ（美術）	【知⑤】（アイディアスケッチの記述） ・障がい・病態に配慮しながら、材質などの制約を考えながら、デザインをすることができている。 【思①・④】（アイディアスケッチの記述） ・様々な効果を考え、構想を練っている。 【態①】（アイディアスケッチの記述） ・その人の立場にたって、自助具のデザインを考えている。
9	・３DCAD による設計・３D プリンタによる射出・成形（技術・総合）	【知①】（データ） ・デザインを Tinkercad で表現することができている。
6	・最終発表の準備（国語・総合）	【思③・④】（発表スライド） ・図や写真などを使って、効果的な発表になるよう工夫したスライドを作っている。 【態②・③】（行動観察） ・仲間と協働して準備活動に意欲的に取り組んでいる。
1	・成果発表会（総合）（本時）	【知④・思③】（発表の状況・発表スライド） ・的確な声の大きさや話すスピードに気を配りながら、スライドで発表することができている。
1	・振り返り	【態③】（アンケートの結果） ・自らの学習を振り返り、本授業の取組でどのような力をつけることができたか、内省することができている。

（計 25 時間：技術４時間・美術４時間・国語４時間・総合 13 時間扱い）

（単元の評価規準）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①３DCAD や３D プリンタの使い方を理解している。 ②誰にでも使いやすいデザイン（UD）を理解している。 ③自助具を求める人の障がい・病態を理解し、どのようなデザインが必要か理解して、問題解決をすることができる。 ④スライドの作成や原稿書きなどの発表の準備をすることができ、準備した内容を的確に発表することができる。 ⑤形や色彩、材料に着目し、材料や用具の特性を生かし、見通しをもって表す。	①自助具を求める人たちの障がい・病態に応じたデザインを自分自身で考えることができる。 ②問題解決に必要な情報について、手段を選択し多様な方法で取得している。 ③図や写真などを使って効果的に発表することができる。 ④機能の美しさの調和、使う人や場所などを元に、形や色彩の美しさ、人への優しさなどの効果を考え、構想を練ったり鑑賞したりする。	①使う人の立場や気持ちを考えてデザインすることに関心をもち、自助具のデザインについて、解決に向けて自ら意欲的に取り組もうとしている。 ②自助具のデザイン等を通して、他社の考えを生かしながら協働して問題解決に取り組もうとしている。 ③積極的に体験活動や、発表準備・発表活動、まとめ活動に参加している。

７　本時の目標

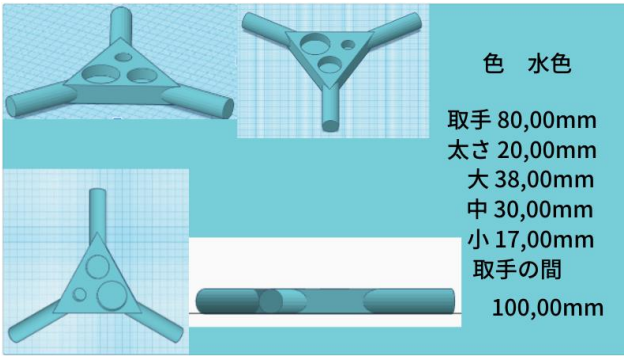
○　一人ひとりが発表者となり、準備してきた内容を的確に分かりやすく説明することができる。

８　本時の展開

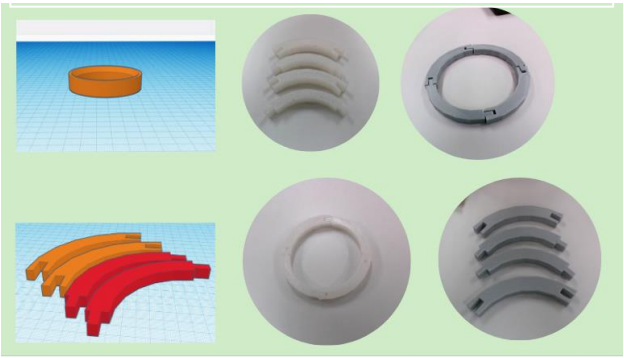
主な学習活動	□評価　◆留意点	●国際理解の活動
○ブースにそれぞれ集まり、発表の準備を行う。 ○現在までの学習の振り返りを５分程度の動画で確認する。 ○本時の目標を確認する。	◆発表の役割について分担を再度確認する。	●UD から国際理解について想起する 【intake 活動】
【課題】一人ひとりが聞き取りやすい声で分かりやすい発表活動を行う。		
○８分交代でそれぞれのブースで発表を行う。 ○聞いている側はそれぞれのデザインや自助具に対する工夫について評価を行い、付せんに記述してブースにある用紙に貼り付ける。	□知技④ （発表の様子の見取り）	●それぞれがデザインした自助具について相手を思いやる工夫を知り、考える。 【output 活動】

〔生徒が作成した自助具（例）〕

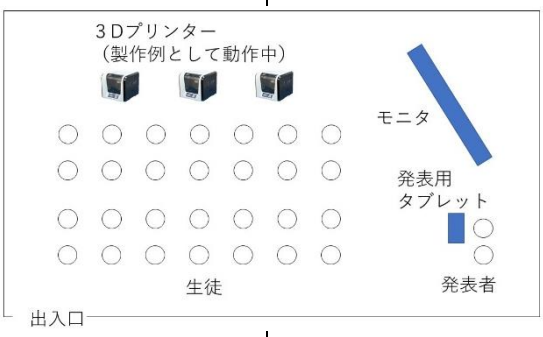
自助具名：キャップリン
対　　象：パーキンソン病など、手の震えがあったり握力が弱い方
特　　徴：様々なフタの大きさに対応



自助具名：るんるんキャリー
対　　象：脊髄小脳変性症など立つとふらついてしまう方
特　　徴：運ぶのが楽、何種類も皿をおける



〔発表形式のイメージ〕



□思判表③
（発表スライド）

◆場に応じた的確な声の大きさや話すスピードに気を配りながら、スライドで発表できているか確認する。

●自分の学校に生活している前期課程児童や外国籍の児童生徒にも使いやすいデザインになっていることを改めて確認する。
【output 活動】

自助具名：ラクラク爪切り
対　　象：左脳出血などで、手で爪が切れない方
特　　徴：脇などで体重を乗せれば爪が切れる

【まとめ】一人ひとりが発表者となり、準備してきた内容を的確に分かりやすく説明することが大切。

○自分たちのブースに戻り、自らの発表について自己評価を行う。

◆質疑応答で出てきた内容についても交流するよう促す。

●言語が違っても、文化が違っても、年齢や性別など多種多様な人が一目でみてわかるようなデザインの大切さについて確認する
【outcome 活動】

【分科会Cから】

1．intake・output・outcome活動を通して育成する国際実践力の育成

① 第７学年　理科「光による現象」

intake活動・output活動・outcome活動を通して国際実践力の育成が図られていた。			
そう思う	56%	どちらかといえばそう思う	44%
あまり思わない	0%	思わない	0％

- 日本と世界の比較がされており、国際理解を意識した授業づくりがなされていた。
- 授業後半の、世界の虹の話題では、生徒全員が興味をもって話を聞いており、意欲的に学習する姿勢が見られた。
- 国際的な感覚として、科学と文化のちがいにぐっと意識をもっていくことができたとは思うが、虹の色がちがう理由は、時間があれば生徒から引き出すことができたのではと感じた。
- 理科の授業の目標を保ちつつ国際教育の目標に近づけることは、３年生の終章以外は難しいと考えるが、今回の授業は上手にバランスを保っていた内容であった。

② 第８学年　総合的な学習の時間「総合福祉デザイン～自助具を製作しよう～」

intake活動・output活動・outcome活動を通して国際実践力の育成が図られていた。			
そう思う	53%	どちらかといえばそう思う	47%
あまり思わない	0%	思わない	0％

- 新しい知恵や発想が生み出されていて、素晴らしかった。
- グローバルな視点が随所で見られた。
- 発表の作成過程を見ることはできなかったが、きっとそれぞれが考え、意見を交わし、グループで作り上げてきたのだと感じた。
- ３Ｄプリンターを整備して、生徒の思いや願いを目に見える形にしたことが、実践力の育成に大きな影響を与えた。
- 主体的に活動する生徒の姿が見られた。
- 器具を作る過程、きっかけについてより掘り下げていき、国際的な観点も増やせていけばより良かった。

2. 学びのゴール　世界に対して「何ができるか」を共に考え、創り上げる

① 第７学年　理科「光による現象」

「世界に対して『何ができるか』を共に考え、創り上げる」児童生徒の学びの姿の育成が図られていた。			
そう思う	56%	どちらかといえばそう思う	44%
あまり思わない	0%	思わない	0％

【成果（○）と課題（▲）】

○ 国際理解教育で求められるoutput活動、intake活動が盛り込まれ、異なる価値観や異文化に対する視野が広がる授業を展開することができた。

○ 物の見え方の違いから、世界各国、人それぞれの考え方があることや違いがあることを、生徒たちが仲間と共感する姿が図られた。

▲ 今回の授業を通して、世界に対して、自分（たち）に何ができるのかについては、思考させる場面を設定するなどの工夫が必要である。

▲ 授業の視点を絞り、「世界」に対して「自分であれば何ができるか」などを明確にした活動を設定する必要がある。

② 第８学年　総合的な学習の時間「総合福祉デザイン～自助具を製作しよう～」

「世界に対して『何ができるか』を共に考え、創り上げる」児童生徒の学びの姿の育成が図られていた。			
そう思う	80%	どちらかといえばそう思う	20%
あまり思わない	0%	思わない	0％

【成果（○）と課題（▲）】

○ 授業者の思いと生徒たちの主体的な学習の成果が十分に伝わる発表を行うことができた。

○ 生徒一人一人が、自分ごとと捉え積極的に発信する姿を見ることができた。

▲ 身近な人たちのために何ができるのかを考えた授業となったので、今後は「世界に対して何ができるか」というグローバルな視点で考えさせる必要がある

3. 学びのゴール　他者と協働して主体的に課題を解決する

① 第７学年　理科「光による現象」

「他者と協働して主体的に課題を解決する」児童生徒の学び姿の育成が図られていた。			
そう思う	67%	どちらかといえばそう思う	33%
あまり思わない	0%	思わない	0％

【成果（〇）と課題（▲）】

〇　個人でじっくりと考える活動を他者と協力しグループで協働する活動につなげる工夫がされている授業の流れが図られていた。

〇　周りと協力しながら、自らの考えを深め、協働して思考する場面が多く設定されるなどの工夫が図られていた。

〇　生徒一人一人が意欲的・主体的に、笑顔で学び合う姿を見ることができた。

▲　生徒たちが、最後まで粘り強く、意欲的に取り組んでいたため、振り返り時間を十分に確保する必要がある。

② 第８学年　総合的な学習の時間「総合福祉デザイン～自助具を製作しよう～」

「他者と協働して主体的に課題を解決する」児童生徒の学び姿の育成が図られていた。			
そう思う	80%	どちらかといえばそう思う	20%
あまり思わない	0%	思わない	0％

【成果（〇）と課題（▲）】

〇　個からグループ活動へつながる活動の工夫が図られていた。

〇　生徒の思いや願いが3Dプリンターを通して形になった後、その製品について使用する側、または、福祉関係の仕事に携わる方などと交流するなどの工夫がされていたため、行動力を高める授業展開が図られていた。

〇　誰もが意欲的に他者と共に思考し、学習したことを全体へ発表することを通して、しっかりとoutputすることができた。

▲　振り返りの場面の時間を十分に保障する必要がある。

4. 授業者から

① 大空学園義務教育学校　７学年　増田　美次郎　教諭

- 理科で国際理解教育の授業を実践するにあたり、エネルギー分野・防災の内容があったが、前例が少なく、参考にさせていただく資料等も十分ではなかったため、今回は光の単元で国際理解教育の授業に挑戦した。
- 世界における虹の見え方という視点を入れて、国際理解の活動の観点を入れた授業にした。
- 生徒たちは普段の授業のように、意欲的に活動していた。
- 世界に対して何ができるかを考えさせることは、とても難しいと感じた。多くのアイデアやご意見等をいただき、今後の授業改善につなげたい。

② 大空学園義務教育学校　８学年　上野　嗣弥　教諭

- 昨年度、パナソニック教育財団より助成いただいた3Dプリンタ７台を利用し、STEAM教育を主眼とした美術・技術・総合的な学習の時間を組み合わせた教科横断的な学習をめざしたものである。

- マルベリーという自助具専門業者と、訪問看護ステーションとコラボレーションして、自助具の制作を進めた。今年度は、さらに国語でのプレゼンテーションを含めて、教科横断的な学習にした。
- 指導案と発表形式を変更しているが、この後の「職場体験学習の発表」や「次年度の卒論」に向けたプレゼンテーションのために変更したものであり、ご理解いただきたい。

5. 協議内容

【協議内容（成果：○、課題：▲）】

① グループ３　発表者：大空学園義務教育学校　島下　涼　教諭

○ 同じ病気の方向けに、二つの違うタイプの自助具が考えられていて、比較することができていた。

▲ 可能であれば、利用者への中間発表ができるとよい。実際に利用者へお渡しして利用してもらい、さらに改善していく必要がある。

▲ 英語の授業で、説明書の内容を英語で作ることができるとよい。世界を意識した、幅広い人へよりグローバルな視点をもつ必要がある。

② グループ５　発表者：帯広市立帯広第四中学校　西岡　正博　教諭

○ 様々な立場の人のことを考えることで、他者理解という視点での国際理解につながる素晴らしい授業展開が図られていた。

▲ 展開の最後の場面では、生徒に考えさせる必要がある。導入で世界のことにふれてみたり、日本で見える色を７色と言わずに子どもたちが見えた色を引き出して展開したりする授業を検討する必要がある。

▲ 虹を見たことのない生徒がいたときに、虹のできやすい条件や、虹を見るためにはどうしたらよいか、虹を見せてあげようなどの学習につなげる授業も検討する必要がある。

6. 助言者から

① 北海道教育庁十勝教育局　義務教育指導班　國木　勇輔　指導主事

- 国際理解教育の中での理科の実践が少ない中で、「光」という分野でみんなで協議できたことがとても有意義であった。
- 「なぜ虹が空に見えるのか」という自然現象に対する問いを解決したあとに、さらなる問いを持たせる工夫をしていた。虹の見え方という、自然現象から文化の違い、表現の違いを理解したり、考えさせたりする内容に工夫が見られた。
- 虹の色の表し方にふれたあと、文字言語による振り返りの活動があった。振り返りの前の活動でも、自分の言葉を他者と協働しながらも、自分の言葉で落とし込む活動をしっかりしていた。

- 探究的な活動の中で、【自然の物事現象→国際理解に関わる出来事】につなげる形（理科の視点から国際理解の充実）、【国際理解に関わる出来事→自然の物事現象】に焦点化する形（国際理解の視点から理科の視点）、生徒に気づきをどのようにさせるか、発問の工夫が必要になる。
- 国際理解教育をキーワードに他教科との関連をはかることを明確にするために、学校全体での単元配当表を作成するなどの整理が必要になる。

② 帯広市教育委員会　学校教育指導課　松本　好史　指導主事

- 国際理解教育研究会と大空学園義務教育学校の共通点を国際実践力の育成につなげ、「いつでも・だれでも・どこでも」という国際理解教育の充実が図られていた。
- 国際実践力の育成については、intake 活動を地域の課題にふれて考え、自分事としてとらえる、output 活動を発表活動を通した協働的な学びの充実を図るとともに、本時までの積み重ねを感じることができた。また、outcome 活動は、形になったものを利用者に届けることで、達成感を味わうなどの工夫が図られていた。
- 本時のまとめを共有することで、一人一人の考えが明らかになり、新たな課題や問が見つかる活動の充実が図られる。
- 発表を通して、健常者でも使いやすいものを考えたり、自分や近い人が使ったりするかもしれないことの大切さを創造する新たな視点が生まれた。
- 新たな探求へつなげるためには、学びの視点を明確にし、発表と発表の間にグループ交流の時間を設け、授業者からの工夫した投げかけなど、教員がファシリテーターとしての役割を果たすことが重要である。

【学習指導案（後期課程知的学級　第７～９学年）】

後期課程知的学級（第７～９学年）　生活単元学習　学習指導案

日　時　令和５年１１月２日（木）第３校時
生　徒　後期課程知的学級（７～９年）７名
指導者　福田　翔・筒井　美有

１　単元名　「いただきます」からつながる世界

２　単元について

普段何気なく口にしている食べ物だが、国が変われば同じ食材でも違う料理になる。また、同じ料理名でも違う食材を使い、全く違う味になることがある。本単元では、生徒たちも身近であるカレーライスを題材に日本と世界を比べ、国際理解につなげていきたい。

その土地によって味が変わるのは、その土地の環境や歴史、文化が違うからである。その国の料理にはその国の人たちが大切にしてきた文化が詰まっているとも言える。人によって、口に合う、合わないはあるが、その土地の文化を知り、理解しようとすることで、味わいも変わってくるのではないだろうか。

このように、違いを受け入れようとすることは人との関わり方にも繋がるところがあると考える。生徒達も一人ひとり違った環境で育ってきた歴史があり、得意不得意も様々である。料理を題材に日本との相違点や共通点を探す活動を通して、お互いを尊重し合える心を育てていきたい。

３　国際理解の目標

- ＢＡＳＩＣ―１（地理的項目－知識・理解）⇒【intake活動】
  世界の食べ物と日本の食べ物を比べ、同じ食材でも違う料理になったり、その国ならではの食材があったりすることを知る。
- ＢＡＳＩＣ―２（文化・言語的項目－体験・経験）⇒【output活動】
  食文化の背景には、その国の環境や習慣、歴史が関わっていることに気づかせる。
- ＢＡＳＩＣ―３（情報発信・行動的項目－表現・意識）⇒【outcome活動】
  異なる文化について相違点や共通点を理解しながら、相手を尊重するために大切なことを考えることができる。

４　単元の目標

世界と日本を比較する活動を通して、互いの国を尊重することの大切さに気づき、一人ひとりの違いを認める心を育成する。

５　大空学園の研究にかかわって

研究主題の「互いの文化を尊重し、多様な世界で生きていく国際実践力の創造」に関わり、スリ

ランカと日本を比較する学習活動を中心に置いた。比較することで日本の優れている点が見えてくるが、同時に相手の国を尊重する必要性も生まれる。相手を尊重するためにどのようなことが大切なのかを考え、実践できるように指導していきたい。

６　指導計画

学習段階	授業の展開	評価の手立てと観点 □評価　　◆手立て
１次（１時間） （知る）	オリエンテーションを行い、学習の見通しを持てるようにする。	□ワークシート
２次（３時間） （調べる・見つける）	スリランカのカレーを作り、食事をすることで、日本のカレーライスとスリランカのカレーライスの共通点、相違点を調べる。	□発表 ◆手順がわかる資料
３次（１時間） （考える） 【本時】	JICAの方を招き、スリランカの国について話を聞く。スリランカと日本の文化を比べ、お互いの文化について共通点と相違点を考え、文化を尊重するために大切なことを考える。	□発表、ワークシート ◆通訳する方 ◆比較しやすいような板書
４次（１時間） （考える）	一人ひとりの違いを認めるために自分ができることを考える。	□ワークシート ◆前時までの資料
５次（１時間） （伝える）	前時で考えた内容をもとに、お世話になったJICAの方にお礼の手紙を書く。	□手紙 ◆手紙の見本

７　本時の目標

○　日本とスリランカの国を比較し、共通点や相違点があることを理解するとともに、互いの国を尊重するために大切なことを考える。

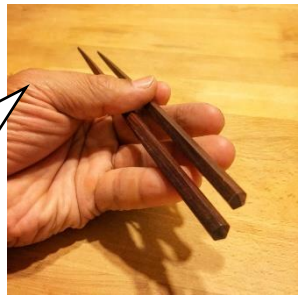
８　本時の展開

主な学習活動	□評価　◆留意点	●国際理解の活動
○講師の紹介	◆通訳を介して、紹介する。	
○前時の振り返り ・カレー作り ・味や食材についての共通点、相違点	◆前時の写真やワークシートを提示し、学習内容を思い出せるようにする。	
【課題】スリランカと日本の似ている所と違う所はどこだろう？		
○スリランカについての習慣や生活について話を聞く。	◆写真やイラストを提示し、理解しやすいようにする。	●スリランカについての基本的な情報を知る。 【intake活動】

○日本との共通点や相違点を考える。 〔相違点の例〕	◆比較しやすいように項目ごとに並べて提示する。	●日本との共通点や相違点を話し合う。【output活動】

日　本

私たちは日々、箸やスプーン、フォークなどを使って食事をしているね。



スリランカ

手で食べるって本当なのかな？どうして手で食べているのかな？聞いてみよう。

○どちらの国も自国を大切にしていることに気づく。	◆一方が優れていて、一方が劣っているのではなく、どちらも自分の国を大切にしていることに気づかせる。	

【まとめ】国によって習慣や生活は違うが、自分の国を大切にしている所は同じ。

○互いの国を大切にするために大事なことを考える。 ・相手の国のことを知ろうとすること。 ・違いがあっても良いと思う。 ・いろいろな考えの人がいて当たり前だと思う。 ・相手が何を大事にしているかを考えて行動する。 ・思いやりをもって接する。	◆日常生活で友達と感覚や意見が違った時を想起させ、相手の気持ちを大切にするときにどうするかを考えさせる。 ◆参考になる意見をとりあげる。 □お互いの国を大切にするために、思いやりのある考えを持つことができる。	●互いの国を大切にするために大事なことを発表する。【outcome活動】

【分科会Dから】

1．intake・output・outcome活動を通して育成する国際実践力の育成

intake活動・output活動・outcome活動を通して国際実践力の育成が図られていた。			
そう思う	63%	どちらかといえばそう思う	37%
あまり思わない	０%	思わない	０%

- 前時のカレー作り体験は、他国を知ろうとするきっかけを作るとともに、スリランカの方々との交流という実体験が生かされる単元構成の工夫が図られていた。
- 体験活動を通してスリランカのことを日本の習慣と比較しながら学ぶなど、intake活動の充実を図ったため、生徒が主体的に関心意欲をもって取り組む姿を見ることができた。
- 料理という誰もが身近に興味がある題材を選んだため、他国の文化と関わるよさや楽しさを知ることへの意欲的な活動につながっていた。
- JICAとの連携を図り、実際にスリランカで過ごした体験談等を聞くことで、多様な価値に対しての対応を「自分ごと」として考える姿が見られた。
- 国際理解教育を通して、コミュニケーション能力の大切さを実感しながら身に付ける取組になっていた。

2．学びのゴール　世界に対して「何ができるか」を共に考え、創り上げる

「世界に対して『何ができるか』を共に考え、創り上げる」児童生徒の学びの姿の育成が図られていた。			
そう思う	63%	どちらかといえばそう思う	25%
あまり思わない	12%	思わない	０%

【成果（○）と課題（▲）】

○ 自分の身近な世界に、目を向け、行動をするために、相手の気持ちを考える大切さを学ぶなど、単元を通して、共に考え、創り上げる姿に向けた授業の流れの工夫が図られてた。

○ 世界には多様な文化があり、他国の人々と触れ合う中で、新たな価値を認めるとともに、気遣いや思いやりを感じることが大切などの発言をする等、生徒の変容を見ることができた。

○ カレー作りの体験から考えるなと、生きて働く知識を身につけるとともに、自国と他国の習慣や文化を比べることで、自分や日本を振り返る活動の充実が図られていた。

▲ 他者と協働して類似点や相違点に気付くという内容であるため、世界に対して「何ができるか」ということを考えるには、様々な課題を見出し、その中でできることを考えるなどの活動を設定する必要がある。

3. 学びのゴール　他者と協働して主体的に課題を解決する

「他者と協働して主体的に課題を解決する」児童生徒の学び姿の育成が図られていた。			
そう思う	63%	どちらかといえばそう思う	37%
あまり思わない	０%	思わない	０%

【成果（○）と課題（▲）】

○ 体験的な活動を通して感じた個々の発言を踏まえながら、グループ内で協力し、１つの課題を解決しようとする姿勢を見ることができた。

○ 習慣や文化の違いを表した写真を協働してスリランカと日本に分ける活動を行ったため、主体的にお互いの意見を聞いたり調整したりする場面を見ることができた。

○ 班での話し合いでは、生徒自ら役割分担を行い、「分からない」ことを「分からない」と言える雰囲気や、教え合う様子が見られるなど、個々の障害の特徴の違いを踏まえた、日常の指導・取組の充実が図られていた。

▲ 全体交流・確認等の場面では、緊張して言葉に詰まったり、自分の思いを文字で表現することが苦手だったりする場面が見られたため、ICTを活用し、個々の実態に合わせた表現方法での工夫を図る必要がある。

4. 授業者から

① 大空学園義務教育学校　知的学級　福田　翔　教諭

- intake活動では、カードを比べる時間を十分に設定する時間を確保する必要があった。
- output活動では、スリランカと日本の文化の違いを見つける活動に意欲的に取り組む姿が見られるとともに、文化の違いに優劣をつけるのではなく理解することの大切さを学ぶことができた。
- outcome活動では、互いの国の習慣や文化を大切にするためには、受け入れ、理解することが重要であることを考えることができた。
- 互いの国を理解し、大切にするためには「何ができるか」などを話し合う場面では、個人思考をグループで共有し、話し合わせる支援を行う必要がある。
- カレーライス作りでは、スリランカの人と意欲的に関わろうとする姿を見ることができた。

② 大空学園義務教育学校　知的学級　筒井　美有　教諭

- いつもと違う環境の中で、生徒たちはとても緊張している様子だったが、よく考え、最後まで意欲的に取り組むことができていた

5. 協議内容

【協議内容（成果：〇、課題：▲）】

① グループ１　発表者：札幌市立琴似中学校　天白　絵梨香　教諭

〇 intake活動では、生徒が意欲的に活動する姿を見ることができた。

〇 課題解決のため、カレー作りの体験等を踏まえながら、主体的に発言し、グループで共有する姿を見ることができた。

▲ カードに記入してる習慣や行動の違いを具体的に気付くことができるよう、体験的な活動を取り入れ、興味・関心を深める必要がある。

▲ 他者への理解を「世界に対して」広げるため、グループ活動の時間を充実させる必要がある。

② グループ２　発表者：大空学義務教育学校　高平　千鶴子　教諭

〇 グループでの話合いではお互いに安心感のある雰囲気があったため、自分の言葉で表現することができていた。

〇 ４人のスリランカの人から実際にカレー作りを体験し、食文化の違いなどを交流することができた。

〇 グループ学習では、学習のまとめで他者を理解するためのキーワードを活用して表現する姿が見られた。

〇 生徒の特性や発達段階をお互いに理解しながら話し合う活動が図られていた。

▲ カードに、前時までのカレー作りにかかわる違いなどの内容を記載するなど、食文化を身近に感じる工夫を行う必要がある。

▲ 食文化の違いはどのようにして生まれるのかなど、考えるための根拠が必要である。

▲ カレーを食べたときの生徒の振り返りなどを踏まえ、本時の課題につなげる必要がある。

③ グループ３　発表者：士幌町立士幌町中央中学校　藍澤　光軌　教諭

〇 文化や習慣の違いを記入したカードを活用したため、分類しやすく、主体的に生徒ができる活動になっていた。

〇 文化や習慣の違いに優劣をつけずに比較するとともに、認め・受け入れ・新たな価値を創造する国際実践力の育成が図れていた。

〇 前時の活動や教員の支援から、自分の意見をまとめ、表現することができていた。

〇 障害の特徴に基づき、教員が「みんなで話そうね」などの細やかな言葉掛けがあったため、協働的な話し合い活動を行うことができた。

▲ 活動内容が多く、まとめ・振り返りの時間が短かったため、カードの枚数を少なくするなどの工夫を行い、生徒の思考・判断・表現の充実を図る必要がある。

▲ 意見は書くことができていたが、言葉が表現につながらず、教師が代読した場面があったため、ジャムボードなどＩＣＴを効果的に活用する必要がある。

6. 助言者から

① 北海道教育庁十勝教育局　義務教育指導班　加藤　章芳　指導主事

- 抽象的な内容の指導よりも、具体的な内容の指導が効果的なので、日本でのカレー作りと、スリランカのカレー作りというところで、比較・検討をもってきたところが、生徒にとって身近でありよかった。
- 異文化を尊重する生徒の育成のために、本単元が「スリランカ」という異文化の学習を通して、日常生活で友達と意見が違ってきた場面を想起させて、自分とは違う様々な意見があることを学ぶ場面の設定がよかった。
- 様々な支援を用意し、生徒の発言を引き出すことが大切である。
- 自分の考えや要求が伝わったり、相手の意図を受け止めたりする双方向のコミュニケーションが成立するという、成功体験を積み重ねることができるように指導していくことが大切である。
- 多様性を認めるという点では、絵で自分の考えを表現している生徒をどう受け止めるか、という姿勢も教員に求められている。
- 自国の文化のよさと他国の文化を尊重するという学習場面から、社会生活の中でお互いを尊重し合える心を育てる授業展開がなされていた、有意義だった。

依田　勉三

大会運営に関わって

冬の白樺並木

5　アンケート結果から

① 研究紀要などの資料やホームページを活用した情報発信を行うなど、大会全体のスリム化が図られていた。

研究紀要などの資料やホームページを活用した情報発信を行うなど、大会全体のスリム化が図られていた。			
そう思う	68%	どちらかといえばそう思う	28%
あまり思わない	４%	思わない	０%

- 会同とオンライン配信のハイブリットの運営が行われたため、遠方でも参加することができた。
- 研究紀要は帳合してあるので、レールホルダーに挟む必要はない。
- ホームページに指導案を掲示するなど、いつでもどこでも研究大会について閲覧することができた。
- 可能であれば、経費・作業時間・環境などを考え、資料などはペーパーレス化する。
- 参加者の集約・研究紀要のスリム化並びにデジタル化・当日の生配信・アンケートの集約などなど、通信環境を整備して大会運営業務がスリム化されていた。
- LINE 等の SNS を活用した連絡や参加申し込みなどの工夫が必要である。
- 開閉会式は、さらに簡略化し、閉会式については、ICT を活用し、各分科会場で行う。
- 開催要項等は QR コードでダウンロードができるようし、帳合いや印刷の手間を省くなどの工夫を行う。
- 事前に QR コードを活用して、指導案集などにアクセスできるようにする。

② 大空学園義務教育学校での１会場で行い、オンラインによるハイブリッド方式で開催するなど、参加しやすい環境づくりが図られていた。

大空学園義務教育学校での１会場で行い、オンラインによるハイブリッド方式で開催するなど、参加しやすい環境づくりが図られていた。			
そう思う	92%	どちらかといえばそう思う	８%
あまり思わない	０%	思わない	０%

- １会場で全てできたため、移動時間も十分に確保することができるとともに、アトラクションまで見ることができるなど、今後の参加者の増加が期待できる。
- 大空学園の校内研修と合致させた新たな研究大会の取り組みであった。
- オンラインを準備し、様々な参加形態を保障することは、大切だと感じるとともに、持続可能な形を検討する必要がある。

- 在外で派遣されている先生方が海外から参加するなど、国際理解教育という特徴が生かされた大会であった。
- １会場で行ったため、小中一貫のよさ、移動の容易さ、児童生徒の主体的な活動、公開した授業を多く参観できるなど、時間にゆとりをもって参加することができた。
- ハイブリット方式では、費用をかけ、配信のオペレーターを付けるなど、オンラインでの参加者もストレスなく公開授業を見ることができたと思う。
- 外交部を中心に、YouTube を活用した配信など、組織的な運営が行われていた。

③ その他、運営にかかわるご意見等

- 授業者としては、非常に動きやすいスケジュール構成および事前準備・当日運営など、ストレスなく授業を行うことに集中できた。
- 準備・運営等、授業内外で多くの人たちとの関わりの大切さを感じた。
- ハイブリッドのノウハウを次の大会へ引き継いでほしい。
- 昼食のお弁当は、シンプルで食べやすく、ごみの分別もしやすく、美味しかった。
- 運営に協力していた８・９学年の生徒が笑顔で手伝いをするなど、日ごろの教育の質の高さを感じることができた。
- レセプションなどを含め、参加者へのおもてなしの気持ちが伝わってきました。
- お弁当配布等など、国際交流部の生徒が手伝うなど、進んで働いている姿に頼もしさを感じるとともに、ブラスバンドの演奏会は、大変有意義な時間を過ごすことができた。
- ３次案内には１日目のスケジュールに研究担当者会議の予定が記載されていたため、資料を用意していた。
- 今回の研究大会では、予算確保に様々な工夫がされていたように感じた。

6　国際理解教育研究大会 十勝・帯広大会を振り返って

令和５年度の 北海道国際理解教育研究大会 が、１１月１日（水）・２日（木）に森の交流館と帯広市立大空学園義務教育学校を会場に、１１年ぶりに十勝･帯広で開催されました。

公開授業は YouTube ライブ配信とのハイブリット開催で、義務教育学校の特性を生かして１年生から９年生までの発達段階の違う魅力あふれる授業を１会場で６本公開しました。

大会の成功を願って（事前準備）

１０月２３日（月）に大会実行委員会が開かれ、大会当日の細かな確認を行いました。その後､教室に入りきれないほどの人数で､大会要項帳合作業､資料袋詰め作業を行いました。

研究大会１日目

理事総会・研修会

小松　北海道協議会会長

野中　大会実行委員長

合田　事務局長

１１月１日（水）は JICA 北海道・帯広に隣接する森の交流館・十勝を会場に、令和５年度第１回北海道国際理解教育研究協議会理事総会・研修会が行われました。

研究大会２日目

１１月２日（木）は、帯広市立大空学園義務教育学校で研究大会が行われました。

授業公開Ⅰ・Ⅱ

第１学年　生活科

- 授業者：松本　美佳　教諭、髙畠　瑠衣　教諭
- 単元名：『むかしからのあそびをたのしもう』

１年生は、様々な国の遊びをその国の方々に直接教えてもらい、日本の遊びとの相違点を知る授業でした。元気いっぱいに楽しみながら外国の遊びの文化を知る授業となりました。

第４学年　総合的な学習の時間（国際理解）

- 授業者：藤原　悠大　教諭
- 単元名：『世界のごみ問題を考えよう』

４年生は，世界のごみ問題を学び自分たちにできることはないか考えました。食品ロス問題に児童から「おなかをすかせておいて、残さず食べる！」と斬新な意見が出され、先生は「月曜日からの給食が楽しみだ！その言葉忘れるなよ！」とニヤリと笑っていました。

第５学年　国語科・総合的な学習の時間（国際理解）

- 授業者：西村　弦　教諭、河瀬　　結　教諭
- 単元名：『大空学園 SDG s　はじめの一歩』

５年生では、SDG s に関する提案を学校内や家庭・地域に呼びかける取組を公開しました。ジェンダー平等、ごみ問題、食品ロス等についてデータをまとめ、お互いの取組を交流しました。

第７学年　理科

- 授業者：増田　美次郎　教諭
- 単元名：『第１分野「光・音・力による現象」　第１章　光による現象』

７年生は、国によって虹の色の数が違うことをきっかけとし、光の屈折について学習を深めました。分光シートをつかって教室で虹を観察し、同じクラスの人たちの間でも虹をつくる色の数に違いがあることを知りました。多様性を尊重する心を育てる素晴らしい授業となりました。

第８学年　総合的な学習の時間

- 授業者：上野　嗣弥　教諭、神下　朋実　教諭、尾崎　弥生　教諭
- 単元名：『総合福祉デザイン～自助具を製作しよう～』

８年生は、障害や病気などによる麻痺、加齢による身体機能の低下を補うための自助具を自分たちでデザインし発表しました。文化・言語・国籍を超えたユバーサルデザインを目指し、最後に 3D プリンターで作成しました。たくさん出された意見を参考に、今後さらに改良していく予定です。

後期課程知的学級（第７～９年生）　生活単元学習

- 授業者：福田　　翔　教諭、筒井　美有　教諭
- 単元名：『「いただきます」からつながる世界』

特別支援学級７～９年生では、日本とスリランカの文化の違いについて学びました。「スリランカの学校は、１０時におやつタイムがある。」という事実を知り、全員が「いいなぁ！」とスリランカへのあこがれが増したようでした。

開会式・全体会

合田　事務局長

野中　大会実行委員長

小松　北海道協議会会長

齊藤　全国協議会副会長

村松　大空学園校長

新山　十勝教育局局長

広瀬　帯広市教育長

稲葉　大会副実行委員長

笠松　大会副実行委員長

開会式では、全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会の齊藤仁副会長よりビデオメッセージが届きました。

関本　北海道研究部長

益子　十勝研究部長

竹内　大空学園研究部長

全体会では、北海道、十勝、大空学園の基調提言・研究発表を行いました。関本研究部長の提言の中で、”東南アジアの車には暖房がついていない”という興味深いお話しもありました。

昼食は帯広名物「豚丼」を食べながら、大空学園吹奏楽部の迫力ある演奏を楽しみました。

分科会

分科会A

分科会B

分科会B

分科会B

分科会C

分科会D

４つの分科会に分かれて事後研修を行いました。

閉会式

牧　大会副実行委員長

野中　大会実行委員長

髙橋　胆振地区会長

小室　大会副実行委員長

閉会式では、次期開催地である胆振地区国際理解教育研究会の髙橋慎治会長から胆振・苫小牧の魅力と研究会の取組が紹介され、十勝・帯広からバトンを渡し研究大会を終えました。１年以上かけて準備してきた十勝・帯広大会。国際理解教育研究会会員や会場校である大空学園の先生方とのつながりが更に深まったことを実感できた達成感あふれる大会となりました。

十勝平野

第 44 回北海道国際理解教育研究大会
十勝・帯広大会実行委員会

【事務局】帯広市立啓北小学校
〒080-0044
北海道帯広市西 14 条北 7 丁目 3
TEL 0155-36-7754
FAX 0155-36-8770